

347
185

CREDO

カトリック信仰講話

クレド

— 我は信ず —



始



73 260
226.



カトリック信仰講話

ク

レ

我
は
信
ず
ド

マルモニエ著

大阪司教ヨハネ・バプチスタ出版認可



Nihil Obstat.
Nishinomiya,
die 1 Jan. 1933.

S. Bousquet
Miss. apost.

Imprimatur.
6 Jan. 1933.
Joannes Baptista
Episcopus Osakensis.

序 言

「クレド」は「我は信ず」の意であつて、カトリック教の信仰の基礎を爲すものである。余嘗て舞鶴公教會在任中、求道者並に信者たちの爲め、教理研究の資料ともなし、且は修徳の一助にもと思ひて、クレドの信條を日曜日毎に連続講述したのであつた。

余、先年香港に在りし時、ブスケ靈父によりて、之を刊行されしところ、意外の好評を博し、日ならずして賣り盡されたるを以て、茲に修正を施し、版を重ね、廣く諸賢の瀏覽に供することにした次第である。

幸ひに愛讀を賜ひて、カトリック信條たるクレドの意義を了解し、その中に含まるゝ教訓によりて、諸氏を救靈に導くの便りともならば、余の大に悦びとするところである。

基督降生一千九百三十三年一月六日

著 者 ペトロ・マルモニエ

目 次

第一	信仰に就いて	一〇一
	天主の事	一〇
	一、その永遠の事	
	二、その無限・遍在・全能・全智なる事	
	三、その攝理の事	
	四、その三位一體の事	
第二	天使の事 附(悪魔の事)	四五
第三	萬物創造の事 (特に人の事に就いて)	五四
第四	人祖墮落の事	六四
第五	人祖墮落の結果(一)	七三
第六	人祖墮落の結果(二)	八〇
第七	聖母マリアの事	八八
第八	耶蘇基督の事(一) (萬民の王にて在す事に就いて)	九五
第九	耶蘇基督の事(二) (神性・人性を兼ね具へ給ふ事)	一〇七
第十	偽りの宗教	一一五

第十一	御托身の事(一)	一二七
第十二	御托身の事(二) (基督は我等が唯一の救主にて在す事に就いて)	一三七
第十三	罪の事(一)	一四五
第十四	罪の事(二)	一五二
第十五	耶蘇基督の公生活(一)	一六〇
第十六	耶蘇基督の公生活(二)	一六九
第十七	奇蹟に就いて	一八〇
第十八	御苦難の事(一)	一九三
第十九	御苦難の事(二)	二〇四
第二十	御復活の事(一)	二一八
第二十一	御復活の事(二)	二二八
第二十二	御復活の事(三)	二三七
第二十三	耶蘇基督の御昇天	二四四
第二十四	聖靈降臨(一)	二五九
第二十五	聖靈降臨(二)	二六八
第二十六	死に就いて(一)	二七六

第廿七	死に就いて(二)	二八四
第廿八	靈魂(一)	二九七
第廿九	靈魂(二)	三〇二
第三十	靈魂(三)	三一一
第卅一	私審判(一)	三一八
第卅二	私審判(二)	三三〇
第卅三	天国(一)	三四〇
第卅四	天国(二)	三四八
第卅五	天国(三)	三五三
第卅六	煉獄 附贖宥の事	三五八
第卅七	地獄(一)	三七一
第卅八	地獄(二)	三七九
第卅九	カトリック教會(一)	三八七
第四十	カトリック教會(二)	三九六
第四十一	諸聖人の通功(一)	四〇六
第四十二	諸聖人の通功(二)	四一六

第四十三	肉身の復活(一)	………	四二六
第四十四	肉身の復活(二)	………	四三一
第四十五	眞の教會の目標(一)	………	四四二
第四十六	眞の教會の目標(二)	………	四五六

目次(終)

ケレド

信仰に就いて

私は、諸君が眞の宗教たるカトリック教を研究なさいますについて参考となり、一にはまた、修徳の一助にもと思ひ、茲に順を追うてお話をすゝめてゆく事に致します。

諸、公教の教へる教理は之を三部に分ちます。即ち、第一は信すべき事であつて、この要點は使徒經中に含まれてをり、第二は守るべき事であつて、之は天主の十誠と聖會の六の掟の中に含まれて居り、第三は聖寵を得る方法、即ち永遠の救靈を得るために必要な聖寵と、之を得るの手段であつて、之は祈禱と祕蹟の中に含まれて居ります。私は是から其の第一の「信すべき事」に就いてお話を致したいと思ふのであります。

(1)

信仰に就いて

先づ我公教の信仰簡條を簡明に現してある使徒信經は、一體何時の頃、如何なる人の手に成つたものかと云へば、是は耶蘇の十二使徒が、主の聖教に基いて作つたものであります。そして此の使徒信經は如何なる時代、如何なる國に於ても、常に總ての信者の唯一の信仰の基礎となるやうに定められたのであります。そして之は普通十二段に分れて居りますから、此處でも其の一ヶ條づゝに就いてお話し致しますが、それに先立ち、我々にとつて最も重要な「信する」と云ふこと即ち

信仰とは何であるか？

と云ふ事に就いて、少しく申上げ度いと思ひます。

第一、信仰とは、天主より與へられる處の一の賜物、即ち人の性に超えた所謂是は超性徳なので有りますから、人が如何程自分の力で是を求めやうとしても、全くそれは不可能と云はねばなりません。例へば、こゝに其の一生涯を通じて公教要理の研究に没頭した人が有ると致しませう。彼は成程學者には成つたでせうが、併し必ずしも此研究の結果、

眞實の信仰を得たとは限らないのであります。乃ち信仰を己が心の内に得るには、どうしても天主様より是を戴かねばならぬのであります。では、天主様は全體如何なる人に對して此の恩恵を與へ給ふのでせうか？ 金持にでせうか、貧乏人にでせうか。或は學者にか、無學者にか、又は高貴の人にでせうか、身分の低い人にでせうか。天主は何人でも、適當であると思召す人に之を與へ給ふのであります。それは即ち天主様の尊前にあつて謙遜なる者、己を空しきものとなし、たゞ天主の御力に由るにあらざれば何事も爲し能はぬことを認め、誠心を以て眞理を熱望し、何事に就いてもたゞ一向に之に信賴む人、かゝる人こそ眞に天主の思召に適ふ處の、信仰の恩恵を得るに適當な人なのであります。

第二、信仰とは全く天主を信する事、疑はず、躊躇せず、一途に之を信じ奉つることでもあります。

「我 信 ず」

と云ふ言葉、之は則ち、天主に對して「主よ！御身の我々に啓示し給ふ聖教は、眞に無上

信仰に就いて

絶対唯一のものでありますから、我は堅く是を信じ、身も心も捧げて是を遵奉致します」といふ意なのであります。諸君は、極く親しい正直な友人の旅行談を聞く時、夫れが假令少しは奇異珍妙なものであつても、是を事實として聞くに相違ありません。併しこの旅行歸りの友人が、如何程眞面目な確な人間であつても、矢張り人間である以上、それ相應の智識を以てした見聞の中には恐らく幾分の誤謬も含まれておませうが、而も人は眞として夫れを信ずるものであります。然るに我が天主様——實に永遠の眞理の源に在して如何にしても自ら決して誤り得ぬ御方、又、如何にしても他を偽瞞し得ぬ御ものである處の此の天主様より我々に啓示し給うた御教に就いて左右云ふのは甚だ可笑なことではありませんか。我々は、其の啓示し給ふ處を些少も疑ふことなく深く信すべきであります。一々固く是を信ぜねばならぬのであります。

第三、信仰とは公教會が我々に示してゐる一切の教を悉く信ずる徳であります。世間には、自分は此の宗教を好んでゐる、天主の存在も、未來に於ける善人悪人の爲の賞罰も

凡て之を信じてゐるが、併し唯一つ

教の或點

だけは、どうも信じ兼ねるといふ人がよく有るのです。斯様に信仰簡條の中、假令一だけでも是を疑つたり、棄てたりする人は、決して正しい眞の信仰の所持者とは云へません。何故なれば、天主様の教示し給ふ處に就いて「主よ！ 御身の平等に示し給ふ御教に關して私は承知できること、承知出来ない事とが御座います」と共んな事が全體云へるものでせうか。否々假にも左様の事を天主に向つて申したならば、それこそ大いなる不敬事件であつて、之天主様の權利に反抗し、其の無上絶なる眞性を冒すものであります。畢竟信仰は天主様の眞實性に由て生ずるものなのですから、若し一でも其の信仰簡條を疑ふならば、もう其れは眞の信仰ではありません。信仰といふものは、造物主と被造物たる人間とを繋ぐ鎖の如きものであります。若その鎖の「一」を取除いたならば、その

鎖は中断

信仰に就いて

してしまひ、もはや、ものゝ用を爲さなくなつてしまふのであります。聖書は決して人間が勝手に作つたものではありません。人の手に成つたものゝ中には、一見眞實の如くみえてゐて其の實誤つてゐるものがありますが、この聖書の中に含まれてゐる處の教は、一切悉く天主より出たものであつて、一として疑ふべき處がありません。それ故、若し或一點だけでも是を棄つるならば、それは總てを放棄するのと同事になるのであります。

聖パウロは「信仰なくして神の御心に適ふ事能はず」と云つて居ります。物質界に於ても、或る建築物の土臺が壞れたならば、その上に立てられてあるものは全部屋根も天井も壁も總て倒れ落ちて了はねばなりません。

信仰も丁度、靈界に於ける建築物の土臺の如きもので靈的生活の基礎でありますから、若この信仰が、ぐらついて來ると、もうその上には何もものをも建てることが出来ず、従つて救靈の業も不可能になつてしまふのであります。

さて又、此處に一人の無信仰者が有るとしませう。彼の性格は至つて柔和、人に對しては甚だ親切、叮嚀であり、又慈善家で、人の世話なども非常によくやる人だと致します。成程、此の人は善い人物であつて、其の行爲は誠に立派に見えるのですが、併し如何せん此の徳は全く

自然的の徳

即ち天主を目的とした信仰に基づく處の徳ではありませんから、成程現世に於ては一時的の報酬を得ませうが、之を永遠の天國にまで導くことは出来ないであります。乃ち諸君、靈魂の救ひを得る爲には、如何しても信仰が必要であります。御主も明らかに「信ぜざる者は罪に定められん」と仰せられてゐる次第であります。斯くも信仰は我等が救靈の爲に最も肝要缺くべからざるものでありますから、我々は此の信仰の寶を熱心に求めるやうに努力せねばなりません。天主に向つて、絶えず此の信仰の寶が、完全に明瞭に、そして益々強まるやうに願はねばならぬのであります。世間には随分我々の信仰を妨げたり、又此の眞理に反對するものが有りますが、併し彼等は別に此の信仰に對する智識があるわけ

信仰に就いて

ではなく、又この信仰の眞の精神を充分知つてゐるのでもありませんから、我々は少しも氣にとめる必要はありません。新聞とか雑誌其の他の書物に依て、たゞ矢鱈に妄評を加へて騒ぐのですから、われ／＼はたゞ彼等の論舌に迷はされぬやうに常に注意することが大切であります。即ち心して教理研究に努め、如何な攻撃にも惑されることなく、又どんな嘲笑を以てされても決して己が信仰を動かさず、斷々乎として、何處までも其の信ずる處に向つて進まねばならぬのであります。それには常に正しい行を守ることが必要で、罪を避けるに充分の注意を致さねばなりません。若これに反して正しい生活から遠ざかる人は、次第に其の

良心が痲痺し

天主の御教を守ることが漸く窮窟になり、遂には其の信仰をも放棄してしまふやうなことになるのであります。

諸君、要は信ずる事です。我は主を信すと云ふ言葉を心の底から叫ばねばなりません。

天主様より啓示された眞理を悉く信じ、公教會の教ふる處を堅く守り、太祖や豫言者、舊約時代の義人達、及び聖母・マリア、洗者ヨハネ、使徒達、又、凡ての時代、凡ての國の諸聖人等と心を協せて「噫天主よ！我は御身を深く信じ奉る。御身の聖徳の扶助を以て我は聖なる信仰の中に生き、信仰の中に死する事を望む」と、諸君、共に喜び叫ばうではありませんか。



信仰に就いて

第一 天主の事

使徒信經の註明に先だつて、まづ信仰とは如何なるものであるかといふ事に就いてお話し申しましたが、愈々本論に入り、使徒信經の最初の一句に就いて説明致します。

『我は天地の創造主 全能の父なる 天主を信ず』

(一) その永遠の事

我は天地の創造主……是は神が確に有るといふ事を教へたものであつて、この神の存在といふ眞理は、抑開闢以來の何時の時代、如何なる國の人の心にも、確然と明かに刻みつけられてきた處の思想であります。では、此の「神」とは如何な性質のものでせうか？ 是に關して次のやうな話があります。

昔シラクアツと云ふ國に、イエロンと呼ばはれる王様が有りました。或日シモニードと云ふ有名な哲學者に向つて、

神とは如何なものか？

と云ふ事をお尋ねになりました。乃ち學者は暫時黙考へてみましたが、どうも即時には御回答致し兼ねる山を云つて、一日の猶豫をお願ひしました。翌日になつて王様は再び昨日の質問を繰返へされますと、哲學者は、どうも未だ考が纏らないからと云つて、もう一日の猶豫をお願ひ致すのでした。翌日になりました、王様はお待兼です。やをら御前に進み出た彼の哲學者は、諸君、驚くではありませんか。今度はどうでせう、尙四五日の猶豫を願はねば、迎も御説明申し兼ねる旨を言上致すのです。王様も餘りの事に聊か變な顔を致されますと、その哲學者は、面色を改めて「私が斯様に御返答を延す所以は外では御座いません。彼の御質問を賜つた時、つひ何氣なしに御引受け致しましたが、さて完全な御回答をなす心算で考へてみますと、仲々どうして、究めれば究める程、益々其の性質が深遠な

第一 天主の事 (一) その永遠なる事

つてきて、愈御説明申上げ難くなるのです……云々」と語つたと云ふことです。宜なる哉、誠に神の性質や、

宏大無邊、無限無量

彼の哲學者の悟つたやうに、是を完全に了得し、説明する事は、到底出来難いのであります。空に輝く太陽を暫時でも凝視すれば、忽にして眼が眩んでしまふやうに、我々も神の本質を、己が智慧の眼を以て眺めやうとしても、其の限り無い大きさ、其の變びない尊さの爲に、餘りにも貧弱な人間の頭腦は、一溜もなく壓倒されてしまひます。神の事を完全に知らうと思ふならば、どうしても其れには神と同等の、限り無い智慧を必要とするのであつて、到底それは吾人の企て及ぶ處ではありませぬ。即ち人間の小さな頭腦では迎も偉大なる神の全性質を悟り得ぬと云ふのですが、併し信仰に依り、又、理性の光を以てすれば、或る程度までの確な是に對する必要な概念を我々は充分に抱く事が出来ます。抑、現世に在つては天主様に仕へ、未來に於ては天主様と一致すると云ふことが我々

人間に負された最終の目的

なのでありますから、天主様の事を知るのには吾人にとつて甚だ必要なことでありませぬ。それには我々は、我々に屬する一切のものを悉く天主様より受けて居り、且つ今後も尙必要なものを總て頂戴かねばならぬのですから、天主様は云はゞ實に我等の大恩人であります。で、其の大恩人の事を好く知ると云ふ是は自然の人情であり、又、當然の義務でなければなりません。

さて其れなら神とは全體何なものか？ 是を一口に云へば、即ち天主様とは限り無く完全にして、天地萬物の創造主且つ是が主宰者であると云ふ。實に所有一切のものゝ根源即御主に在するのであります。まづ第一其の限りなき完全とは即ち圓滿具足とでも云ふか、是は我々の思ひも及ばぬ善を具へて、獨り自ら幸福なる御者との意であります。言ひ換へれば、絶對であり無限であると云ふ、即ち神は始なく終なく、萬物を超越して其れ自ら存在なし給ふ御ものであります。諸君は

ク
レ
ド
ものには凡て始が有る

ものだと云ふ事を御存知でせう。例へば、今日此の地上に生存してゐる子々人間は如何かと云ふに、今を百萬年前に溯れば全く其の影さへ見る事が出来なかつたのです。又、大阪とか東京とか云ふ此の大都市も、づつと歴史を溯つて、何百年、何千年の昔に至れば、寂莫い草原の中に唯四五軒の荒屋が点在してゐた時代もあつたに相違ありません。或は又天空に輝く彼の太陽にしても、夜の空を行く月や星など、凡て皆、何時の日か其の起源をもつてゐるのですが、併し神には此の始と云ふものがないのであります。世間には「何でも始原のないものは無く、假令神であつても矢張り其の始があつたのだ」と云ふ人もありますが、この神に始が有つたと云ふのは、結局最初に存在してゐなかつたとの意であり、斯うして若し初に神が存在して居らなかつたとすれば、一體後で何者が是を作つたのでせうか？ 勿論、何ものたりとも是を造り得るものではありません。何ものも是を作り得ぬのならは何で神が存在しませうや。然るに一方種々の確な證據に依て、神の存在は誠に明

らかな事實となつて居ります。神の存在が明確であつて而も是は何者からも造られないものであるとすれば、即ち神とは始原と云ふものがなく

永遠無始の昔

から其れ自ら存在して居つたものと云ふ事になります。乃ち是は極めて合理的な決論であり、又、動かす事の出来ぬ眞理であります。諸君、試みに我々の想像を以て能ふ限りの年数を大昔の極點であると思ふ處まで溯つて考へてみませう。この想像に由て得た處の遠い遠い年数を尙百萬年、或は數千億萬年の昔に溯り、尙其の上に世界中の木の葉、草の葉の數を加へ、其の上に尙又、世界中の砂の一粒々々の數を加へても、それでも未だ神の存在しなかつたと云ふ時には達しないのであります。で更に此の年數に我々の想像爲し得る限りの數字を加へてみませう。(一體數字と云ふものは、僅で随分長い時間を示すものであります。例へば、基督の御降誕より今日に至る一九三二一年といふ長年月も、之を數字に示せば、纔に一、九、三、二、と唯此の四字を記せば可いのですが——此の數字を

ク
レ
ド

葉書一枚にか、或はノートブック一冊に細少く書き連たならば、如何な數になるでせうし今假に其れだけの數字を年の數として是に加へてみやうと云ふのですが、併し、それでも決して神の始つたと云ふ日に達することは出来ないであります。こゝに至つて諸君、神とはどうしても起源なく、永遠の昔より存在なし給ふものであると考へないわけには参りません。處が斯うして神には始がないように、又、終といふものもないのです。諸君は、我々の周圍に在る一切のものに、凡て

終が有ると云ふ事

を、日々の經驗に依てよく御存知でせう。先づ手近な處から申せば、この我々人間に早晚終焉即ち死の來ることはもう云ふまでもない事であり、又、幾等その豪者を誇る大邸宅でも墮て壁落ち、屋根は漏れ、柱は朽ち倒れてしまふと云ふ日が屹度到來るのであります。木も枯れませう。石も壞れませう。が、併し、神には決して其の終末と云ふ事がありません。假令地球や太陽の滅ぶ日、世界の一切のものが、凡て元の無に歸す時が來ても、神は

依然として尙存在し給ふのであります。萬古不變とは、げに神にあつてはじめて言ひ得る言葉であります。即ち此の永遠といふ、

天地萬物創造以前

の量り知れない長年月を考へ、又同時に此の天地萬物が其の終末を告げてから後に續く限りない時間の事を思ふ時、我々の智慧は、全く其の廣大さに眩惑されてしまつて、迎も正確な其の觀念を包含し得ないのであります。それも其の筈でせう。大體この永遠を、時間即ちタイムを以て計り、比較しようとするのが間違ひで、是と彼とは全然異つた立場から考へねばならぬ問題であると云ふ事を忘れてはなりません。即ち時は、區分し區劃を立てる事、例へば一分二分といひ、又、一週間、一ヶ月などと區別を付ける事が出來ますが、永遠と云ふものは、斯様に分ける事が全く出來ないのであります。この世は此の時の連鎖即ち今の一時が去れば、次の一時が始り、一日が過ぎれば、翌日が廻つて來、一年が終れば、直に新年が是に續くと云つた有様で、二の時、二の週が同時に存在するなど云ふ事

は決して出来ません。若し何人かゞ、自分は四十歳であるといふなら、其れは彼の生命が四十年間過ぎ去つたといふ意味であつて、現在其の四十年間といふ年數を、彼が持つてゐるものではありません。斯うして我々は、一刻又一刻と交、其の一時、其の一時を持つのですが、併し天様の生命は全く是と趣を異にして居ります。其れは人の生命のやうに分離する事も、又、次々變る事も又續くといふ事も出来ません。丁度、凡ての世紀、凡ての時代を抱く唯一の天のやうに、恒に現在であります。神の生命には、

時の流れ

と云ふものが有りません。畢竟過去と云ひ、未來といふものが無いのであつて、若し神は百年前にも存在してゐた、百年後にも尙存在してゐるであらう、と斯様な言ひ方をするなら、其れは不適當であると云はねはりません。正しい適當なる言葉は、たゞ「是、是であります。誠に神には、昨日なく明日なく、昨年なく來年なく、過去なく未來もない」と云ふ即ち其の生命は恒に現在なのであります。

聖書に「神は人間を御自分に似せてお造りになつた」と誌してありますが、是は天様が、我々人間に適當した永遠を御分配になつたからであります。靈魂不滅てふ事、云ひ換れば、神が人の靈魂を不滅なるものに造り給うたと云ふ事は、全く斯うした理由に外なりません。即ち

我々は始があつたが併し終と云ふものがない

のであります。そこで我々は永遠の半分を持つてゐる（是は言葉が適當ではありませんが）と云つたやうな事も云へるわけです。我々は聽て來るべき此の未來の永遠の世に於て、どんな状態になるか、誠に是は重大問題であります。諸君は、一切の人に與へられる「死」と云ふ平等なる關門を一度潜る時、其處には一體如何な運命が自分を待つてゐるかといふ、斯うした問題に就いてお考へになつた事が有りますか。即ち現世を去る時、天様の聖寵を豊に持つてゐた善人であれば、此上もなく完全な幸福を受くる筈であり、又、大罪を持つて逝つた悪人なれば、どうしても地獄の苦罰を免れ得ぬのであります。我々は造たる天

ク
レ
ド
主様に依つて此世に置かれ、死しては永遠の幸福か、或は永遠の苦かの何れかに入るべきものと定められてゐるのですが、併しこの何れを擇ぶとも、其の

運命の鍵は

全く我々の手に、我々の自由に任されてゐると云ふ事を忘れてはなりません。諸君、我々は、お互ひに早晚この何れかの永遠に入らねばならぬのですぞ。幸ひ此の永遠の賞罰でふ考を常に念頭に置くならば、我々は愈熱心に善を行はんものと奮發する筈ではないでせうか。世の中には往々次の様なことを言ふ人があります。即ち「絶えず己が慾情を抑へたゞ靈魂の爲にと云つて、世の友、世の快樂、其の他の事共に遠ざかり、二言目には、悪魔よ、世間よ、と云つて、終に山へなど逃げ込んでしまふやうな人も有るが、是は、随分馬鹿氣な話ではないか」と。併ながら諸君、假令我々が此處十年、廿年、五十年の苦行を続けねばならぬとしても、是を一度永遠の前に比較するならば、これは又、何と大きな差違ではありませんか。

天國

を想ひ、其の永久の福樂の事を思へば、現世に於ける暫時の苦痛などは、もはや全く問題ではありません。何卒諸君、現世に於ける快樂の空く、又、其の生命の短く果敢いものである事を充分に悟り、たゞ一向に心を高く神に上げ、善を行ひ惡を避け、聽て受くるであらう永遠の榮福を望んで、勇往邁進されん事を切望致す次第であります。

(二) その無限・遍在・全能・全智なる事

引續き天主様の事に就いて申し述べます。

聖オウグステノは「或時、私が地上に在る凡てのものに向つて、汝等が神であるか、と尋ねたが、彼等は一樣に、自分等は神でない、と答へました。海に在る一切のものに對しては、神を發した處が、彼等も亦、自分等は神でない、と答へました。そこで、今度は

第一 天主の事 (二) その無限・遍在・全能・全智なる事

天の太陽、星、月等に向つて聞いてみた處が、彼等も亦、自分等は神ではないと答へるのです。そして聽て悉皆聲を揃へて『神は我々の上に在す！』と叫びました」と、斯う云ふ事を云つて居ります。諸君も、天主様とは、我々の周圍に在つて、我々の目撃し得る、

此の宇宙萬物とは全然別種の或物

である、是等のものと天主様の間には、限り無い隔の有るものだと云ふ事を、よく御存知だと思ひます。科學者の研究に依て、我々は宇宙の宏大さを教へられて居りますが、併し是さへ神の眼前には、極めて小さな、限定され範疇された一被造物に過ぎないのであります。誠に神は絶對的に獨立不覇であつて、其の宏大さは到底我々の量り知り得る處ではありません。それに、全く靈體である神は、丁度、我々の神經が全身の各部分即ち手、足、目、口の至る所に行き度つてゐるやうに、或は又、一のランプの光が部屋の隅々を照らすやうに、形なくして何處にも存在し、よく其の全能を以て、己が創造した悉皆のものを主宰なし給ふのであります。

神は又『全智』なる御ものですから、萬事何事も知り給はぬと云ふことが有りません。我々が何處で何を爲さうとも、假令其れ一家の中、山の谷蔭、或は又海の中であつても、神は必ず是を知り給ふと云ふ、即ち如何にしても我々は其の御目の前を一刻たりとも逃れる事が出来ぬのであります。人知れず犯した悪事でも、又、竊に爲した讒言、誹謗、或は心の中に起した怨恨、憎惡の念に至るまで、悉く是を見透し給ふと云ふ、誠に神は恐るべき御方ではありませんか。悪人は暗闇の中に罪を犯せば判らないだらうぐらゐに考へてゐるでせうが、併し神には、暗闇と云ふものが全く存在致しません。斯んな話があります。或人が一人の聖人「ひと」罪を犯させてやらうと、頻に或事を奨めました。すると聖人は其の人に向つて「何卒

神の居ない場所

を捜して下さい。そんな處が発見つたら仰せに従ひませう」と答へられたと云ふ事です。我々も誘惑に遭つて、罪に陥らうとする時には、須く此の聖人の言葉を思ひ出して警戒す

べきであります。諸君、天主様は我々の慈父であると同時に又嚴格なる裁判官であらせられる事を忘れてはなりません。常に此の事を念頭に置いて、神の目に罪を見せぬやう絶えず心して戴き度いものであります。

神は又、其の『全能』に依つて、よく萬物を掌り給ふのであります。我々は皆其の偉大なる御手の下に生き且つ存在して居るのであつて、若し神にして、一瞬でも其の保ち掌り給ふ御手を止め給へば、我々は即時に消え失せてしまはねばなりません。即ち

無より造り出された我々です

から、再び元の無に歸さねばならぬのであります。早魃の際、如何程天に向つて雨を呼んでも、到底一滴たりとも自由には是を降し得るものではありません。又、一粒の砂など云つて、よく微小なもの、譬に引出される砂粒ではあります。若し是を無より造つて見よと云はれたら諸君はどう致します。假令世界中の學者、富豪、権力家が集つて力を協したとて、是は迎も出来ぬ相談でせう。又こんな物語が有ります。昔デンマークに聖カヌート

と云ふ王様がありました。或日家來を隨伴して海邊を散歩して居られた時、例に依て又家來共は、王の權勢が天にも地にも偏く行き渡つてゐると云ふ事を頻に稱揚したのでした。常々斯うした追従を苦々しく思つて居られる王様は、如何にかして彼等の卑屈な心根を改めたく思召されて、其の時斯ういふ事を致されました。即ち王様は渚に直立して波に向ひ、威嚴ある聲して命じ給ふよう「波よ、余が方に一寸たりとも近寄る勿れ、又其の飛沫を以て余の衣服を濡しでもしたら承知しないぞ」と。固より波が王様の其んな命令に従ふ道理のものでもありません。恰も潮の満ちやうとする時だつたので、水はぐんぐん其の量を増してきて王様の足を浸し、馳て其の御衣服にまで及ばうと致しました。さあ大變！ 家來共は此の様をみて、すつかり狼狽し、何卒早く後方に退き給ふよう一生懸命にお願ひ申しました。乃ち王様は、やをら身を引き、靜に彼等を顧みて申されるには「お前方は、先刻から、余がまるで大權能者であるかのやうに稱揚してゐたが、今こそ余に如何な力が有り、何か出来るかと云ふ事をよく知つたであらう。見よ、此の海の瑣々たる波を！ 余は是を

さへも自由にすることが出来ないのだ……云々」と仰せられたと云ふ話です。諸君方も各々の経験に依て、人間なるものが如何に無力であり、又、貧弱なものであるかと云ふ事を充分御存知のことと思ひます。然るに神はどうでせうか。一度神の全能に思ひ至る時、たとへば感嘆の外は有りません。御覽なさい、空に輝く太陽を、星を！神は是等のものを唯一言で無より造り出されたと云ふのです。若し思召しなれば再び又、是等のものを元の無に今の今でも歸し給ふ事も出来ませう。其の思召し給ふことは、何の手数も要せず、唯の一言、然り唯の一言で爲し遂げ給ふ神！ 上は大使のやうに勝れたものから、下は微細なバクテリアの類に至るまで是を創造り給うた神！ そして其の能力の永遠に減少する事のないと云ふ神！ 我々は此の神の絶大さを思ふ時、たとへば黙して

其の御前に跪く

より外すべを知らないのであります。

神は又、限りなく「聖」なる御ものであります。聖とは即ち些少の穢なく、何處までも

潔白清淨にして且つ尊い事を云ふのであります。不完全とか、穢など云ふものは、假令其れが如何程微小なものであつても、決して神に近づく事が出来ません。乃ち天主様は、その造り給うた處のものを、如何に愛し給ふとは云ひながら、若し其の中に些少の穢、罪の影でも發見されたならば、決して是を容赦し給はず、直に其の御前を遠ざけ給ふのであります。聖母マリアは溢るゝばかりの聖寵に導かれて居りましたから、全く罪を犯すなどと云ふ事が有りませんでした。若し假に、彼女が、大罪の一でも犯したとすれば、神の御母であつても、神の御前に出る事は到底叶はぬのであります。斯く神と罪とは全然相反するもの、丁度、炭と雪の相違の如く、其處には

天地の隔

があつて、永遠に相融和する事が出来ないものであります。諸君、我々は何時か此の聖なる神の御前に出頭して其の峻厳なる審判を受けねばなりません。其の際、神の御目を汚す事なきやう、常々心して潔い生活、即ち其の思、言、行爲の一切を聖ならしむるやうに

努力せねばなりません。

(三) その攝理の事

今度、神の「攝理」に就いてお話しませう。天主様は宇宙萬物を創造し給うたばかりではなく、是を保存し主宰し給ふのであります。其の思召しに依りて世界萬物を作り出し給うた神は、聖慮のあらん限り、是を永へに保持し主宰爲し給ふに相違ありません。誠に此の神の攝理は歴々然として世界萬物の上に顯れて居るのです。幾萬の巨大なる日星が、整然として運行する天空を仰いで御覽なさい。空飛ぶ鳥、水中の魚、地上に匍ふ蟲蝶の匹々々の上に至るまで、

懇切なる神の御攝理の手が

如何によく行届いてゐるか云ふ事を、我々は屢見せつけられてゐるではありませんか。

雨を與へて草木を成育せしめ給ふ神、天に於いて、天使達に無上の幸福を與へ給ふ神は、我々人間の上を殊に注意なし給ふといふ、即ち聖書にも誌されて有るやうに「我々は其の毛髪までも算へられてゐる」のであります。誠に此の天地間に在つて天主の御旨より出ないものとは一もありません。雨や風、雪や氷、雷、地震、或は凡ての生物の生、死、幸、不幸、盛、衰など、たゞ／＼神の攝理に依るのであります。一羽何錢に賣られてゆく小鳥ではあります、併も是御父の御思召しでなかつたならば、其の一羽をも捕ふる事が出来なかつたに相違ないのです。天主様は斯のやうに宇宙萬物一切大小の區別なく、是を掌つて居られるのですが、之は天主にとつて、少しも六ヶ敷い仕事ではありません。人間界では、假令一國の皇帝であつても、何か大事業をなす際には、必ず澤山の人手を借りねばならないのですが、併し天主様は全智全能にして、限りない権能を具へ給ふ御もの故、何を作り、何を掌るにも、別段、心勞とか手數などの有りやう筈がなく（實に唯一言葉を以て宇宙萬物を無より創造された云ふ）誠に其の望み給ふ處の事は、何事でも出来ない云

ふ事がないのであります。

神の御目は不斷一切のものの上に注がれてゐると云ふ事、我々は其の御目の前を一瞬たりとも逃れ得ぬものであると云ふ事を考へる時、我々の

人生觀

は、がらりと變つてしまひます。即ち我々の身の上になる凡ての出来事は悉く神の干與し給ふ處であると云ふ是皆、天主の思召しであつて、一切我身の利益となるのだと思ふ時、其處には、もう不安なく焦燥なく、たゞ云ひ知れぬ感謝の念が湧くばかりであります。諸君は、彼のヨブといふ聖人の物語を御存知でせう。即ち、或日彼の許に一人の人が来て云ふには「貴殿の耕作つてゐる作物はすつかり駄目になつてしまつて、何一粒の收穫もありません。その上、貴殿の子供は家が潰れて其の下敷となり、皆な死んでしまひましたよ」と。この悲しい報知を聞いて、ヨブはどうしたでせう。誰しも彼が失望落膽するに相違ないと思つてゐたのに、彼は直に跪いて天主様に感謝して「主は凡てを吾に與へ給ひ、又

吾より取去り給ふ、主の御名は祝せられ給へかし」と祈つたと云ふ事です。なんと立派な行爲ではありませんか！ 諸君、我々も貧困に苦み、病氣に襲はれ、或は

愛する者と死別

せねばならぬやうな際には、宜しく此のヨブのやうに「主よ、御身の思召しのまゝに成し給へ、御身に榮あらん事を」と祈らねばなりません。此世に於て、人が不足なく安穩の内になり暮し得るやうになると、彼等は天國の事を忘れてしまつて、其の靈魂を失ふやうな事になり勝なものです。天主様は此の事をちやんと御存知でありますから、左様の事のないやうに、慈悲を以て彼等に何かの苦痛とか困難を與へて、天國を忘れさせないやうにお取計ひになつて居ります。天主様は我々よりも、我々に何が最も必要であるかと云ふ事を、よく御存知であり、そして其の最も利益となるものを與へ給ふのであると云ふ事を思へば誠に心安き哉ではありませんか。それ故、若し我々に何かの苦痛、心配、悩み等の起つた場合には、是正に我々の

ク
救 靈 の 便 り

として、天主の我々に與へ給ふ處の恩恵なりと感じ、大いに是を感謝せねばならぬのであります。斯うした次第でありますから、我々が將來の事を徒に心配すると云ふのは、結局天主様を信用しないからだと言ふ事を考へねばなりません。諸君、あの一切を委しきつて母の胸に抱かれてゐる幼子の有様を御覽なさい。幼子は、母が乳を吞まして呉れようか、寒くなつたら着物を重ねて呉れようか？ など、決して心配するものではありません。で我々も天主様に對しては、この幼子のやうになつて、其の攝理の儘に導かれるやうにせねばならないと云ふのであります。耶蘇基督の聖言に「空の鳥を見よ、彼等は播く事なく、刈る事なく、倉に收むる事なきに、汝等の天父は之を養ひ給ふ、汝等は是よりも遙に優れるに非ずや。汝等の中、誰か思ひ煩ひて其の生命に一時だも加ふる事を得る。又、何とて衣服の爲に思ひ煩ふや。野の百合の如何にして育つかを看よ、働く事なく、紡ぐ事なし。然れど我汝等に告ぐ、ソロモンだも其の榮華の極に於て、此百合の一ほどに装はざりき。

今日在りて明日爐に投入せらるゝ野の草をさへ、神は斯く装はせ給へば、況や汝等をや。信仰薄き者よ、然れば汝等は、我等何を食ひ、何を飲み、何を着んかと思ひ煩ふ事勿れ。是皆異邦人の求むる所にして、汝等の天父は、是等のもの皆汝等に要あるを知り給へばなり。故に先づ神の國と其の義とを求めよ、然らば是等のもの皆汝等に加へらるべし。然れば明日の爲に思ひ煩ふこと勿れ、明日は明日自ら己の爲に思ひ煩はん。其日は其日の勞苦にて足れり」とあります。

處で、天主様が是程結構に此世の事を處理し給ふ筈であるのに、何故世間では、よく惡人が成功して善人が不幸に陥つたり、或は罪有る人が世の尊敬を受けて贅澤な生活をしてゐるのに、善人が苦勞せねばならなかつたりするのだらう？ と咄く人が有りますが、是は大いに考へねばならぬ問題であります。全體、人間の生命と云ふものは、決して此世限りのものではなく、假令

肉 體 は 消 滅

しても其の靈魂は未來永遠に續く筈のもので有ると云ふ事、即ち未來に於ける善惡の賞罰
てふ事までに考へ及ばぬ人の是は愚言であると云はねばなりません。成程ソロモンの云つ
たやうに、此世に於ては「善人の上にも悪人の上にも同じ事が行はれると云ふ、即ち主は
太陽の光を何處にも照し」給ひませうが（天主様は善人悪人の區別なく、樂み又は苦みを
與へ給ふとの意）併し又、聖書にも誌されてあるやうに「世の終に當つて、天主様は善人
悪人を別け給ふと云ふ、即ち其の日の峻嚴なる審判の前に、一切の人は各々現世に於ける
行爲に應じた賞罰を受けねばならぬ」筈なのであります。それ故、天主様の御計ひと云ふ
ものは、決して此世のみを目的としたものではありません。實に永遠を目的としたもの、
即ち來世に續くもので有りますから、たゞ

現世の幸、不幸

を以て、是を咄くのは、甚だ愚な話と云はねばならぬのであります。

我々は、本當に短い時間しか現世に生存致しません。それ故、何か事業でも企てると、

例へば家などを建てるに際しても、日夜是に氣を配つて、一日も早く其の出來上りを待つ
ものです。併し天主様は凡て永遠を標準として物事を爲さいますから、決して人間のやう
にお急ぎになりません。即ち罪人を罰するにも、又、善人を賞するにも、常に相當の時間
を其處に残されて居ります。全智なる天主様は、その神たる御自身の御手から、何物も離
れゆく事の不可能であり、又、忘れ去る事も叶はないものであると云ふ事を、よく御存知
でありますから、何事を決定するに際しても、少しもお急ぎになる必要がありません。た
だ不斷に、その永遠の御座所から、恢々として、世に榮える悪人や、苦難に泣く善人の上
を憐れられてゐるのであります。噫として諸君、我々は聽て現世の淺な生命を終へ、萬人
等く永遠の門に入る時、其處に於てこそ天主様は、各人に相應しい至極公平なる場所を與
へて下さるのであります。

それにしても、世中は餘りに矛盾、不公平すぎると云ふ人が有るかも知れませんが、併
し、其れは斯うした理由なのです。即ち假令地獄の苦罰に相當する大罪人であつても心に

若干の善を持つてゐるに相違なく、又、如何程の善人といへども、その心中幾分の缺點を持つてゐるに相違ありません。そこで天主様は、悪人に永遠の褒美を與へるわけに参りませんから、其の持つてゐる些細の善を賞して、現世の短い樂みを與へ、又善人には、天國に於ける限りない福樂を與へんが爲に、其の缺點を償はすべく、此世の短い苦痛を與へ給ふのであります。是に就いて聖グレゴリオも斯う云つて居ります。「此世に於て成功する人よ、懐ひ懼れよ！ 汝の受けてゐる褒美は、短い此世の快樂の外に何物もないと云ふ事が分からぬのか！」と。言や善し、誠に此の通りではありませんか。是に反し、現世に在つて絶えず苦み惱んで、常に十字架を背負つてゐる人々は如何でせう。人の目には、神に棄てられたように見えてゐても、決して然らず、

神は益其の人に近付き給ふ

のであります。諸君、主の爲に苦む者は幸なる哉！ 御覽なさい、聖母マリアを、又、使徒や多くの聖人達を！ 彼等は皆天主様に限りなく愛せられたに拘らず、矢張り耶蘇基

督のやうな、甚だ敷い苦惱、迫害を受けたではありませんか。これは聖書にも誌されてある通り、天主様は、己を愛する人々を潔め、現世のものより解脱させ、御自分に愈固く結び着かしむべく、嚴しい試練を與へ給ふのであつて、此の暫時にして過ぎゆく試練を、善い心を以て耐え凌いだ曉には、其處に終りない無上の福樂が我々を待つてゐる筈であります。何卒諸君、堅く此の事を信じ、凡てを天主様の御攝理に委し、その攝理の中に安んじて生活なさらん事を切に望む次第であります。

(四) 三位一體の事

天主様の本性は唯一獨特のものであつて、數の一のやうに、ふやす事の絶對に出来ないもので有ると云ふことは、諸君の既によく御承知の處でありますが、

此の唯一なる神性の中に三の御方がある

第一 天主の事 (四) 三位一體の事

と云ふ事、即ち聖父と聖子と聖靈の三のペルソナが含まれてゐるてふ事に就いて少しくお話を致したいと思ひます。

聖書に、耶蘇が洗者ヨハネより洗禮を受け給うた時の有様を、次のやうに叙して居ります。『耶蘇洗せられて直に水より上り給ひしが、折しも天彼の爲に開け、神の靈鳩の如く降りて我上に來り給ふを見給へり。折しも又天より聲ありて「是ぞ我心を安んぜる我愛子なる」と云へり』と。諸君は此の句の中に三のペルソナの有ると云ふ事實が明かに誌されて居るのを御覽になりませう。即ち、天に聞えた聲は天主御父の聲であり、洗禮を受け給うた御方は天主の御子であり、其の上に来つて留つた鳩といふのは即ち聖靈なのであります。又、御主耶蘇基督が愈御昇天にならうとする時、弟子達に對して、斯う云ふ事を仰言つて居ります。「汝等往きて萬民に教へ、聖父と聖子と聖靈の御名に因て是に洗せよ」と。即ち此の言葉に依り耶蘇は聖父と聖子と聖靈と云ふ三位一體の玄義を白地に御示しになつてゐるわけであります。此處に於て、我々は如何しても、天主様とは御一體の御もの

でありながら、而も三の區別されたペルソナを具へ給ふと云ふ事を信ぜねばなりません。そして同時に、此の三のペルソナは、相異なる相互關係に立つにも拘らず、皆各唯一の神性を己がものとして完全に所有するが故に、各々眞の神で有るてふ事、即ち聖父も聖子も聖靈も、全智全能、絶對無限、完全なる御もので有る事を信ぜねばならぬのであります。従つて此の各々のペルソナを

別々に我神、我主として禮拜する

のですが、併し又、決して三の神、三の主が有るとは云へません。乃ちカトリックの信仰は、其のペルソナを混同する事なく、又、其の本體を分つ事なく、唯一の神を三位に於て又、三位を一體に於て禮拜する事でありませう。何故なれば、聖父と聖子と聖靈といふ其のペルソナは各々別ですが、是等の神性は一であつて、その光榮は等しく、其の稜威は共に無窮だからであります。即ち聖父も聖子も聖靈も造られたものでなく、共に宏大にして永遠のものであります。併し是は決して三の異つた永遠なる者の有る意ではなく、此の

三のペルソナを通じて唯一體の神の性質をとつてゐると云ふ事を忘れてはなりません。全能なるものが三有るのではなく、全能なるものは一。聖父も聖子も聖靈も神に在すが、是は三の神が有ると云ふわけではなく

神は一。

聖父も聖子も聖靈もみな主であるが、三の主が有るのではなく、主は一で有ります。以上大分六ヶ敷い説明になりましたが、是をもつと分り易く簡單に云へば、我々人間の體、是は肉體と靈魂といふ二のものが合して一個の人間を形成してゐるのですが、是と同様、三のペルソナを包含して唯一の神の體をなす、と云ふ事も、決して道理に外れた事ではありません。何れにしても、此の三位一體の理義は、玄義と云つて、神の啓示がなければ到底我々は其の深意を悟る事が出来ないのであります。併し尙ほ一二の譬を以て左に之を説明してみませう。こゝに天主御自身の事を悟り得る者は、矢張り天主同様、永遠にして又、完全無缺のものでなければなりません。そこで此の天主様が御自分を知ると云ふ事、即ち

天主より發した處の思想といふものは、神御自身より生じたものでありますから、是を天主御子と稱する事が出来、又、この天主御父と其れより生じた御子の相互間に現れる愛が即ち聖靈と呼ばれる處のものであつて、是又、永遠にして限りなく完全なるものであります。畢竟聖子は永劫の初より聖父より生じたもの、聖靈は聖父と其の聖子より發するものであります。勿論、この時間を超越する發生關係を除いては、聖父も聖子も聖靈も其の前後上下の差別がないのであります。

今度は具體的な例をとつてみませう。即ちあの太陽です。本體である火玉、其處より發する光線、火玉と光線から生ずる熱と云ふ此の三は各々別の特色を具へながら、矢張り一の太陽を成して居ります。我々は此の火玉を天主御父に、光線を御子、熱を聖靈に譬へるのですが、無論是とても決して完全な言ひ表し方ではありません。何としても我々人間の淺薄な智慧で、無限なる神の御事を知り盡さうとするのが誤なのです。聖フィリツポの言葉にも「我々は眼の前の極めて小さな事物に就いてさへ、解らない事が澤山あるのに、

何で僅此の

一二寸の額

を以て、極まりない神の性質を推知できやうや」とあります。誠に然り、第一人間は自身自身の事さへ完全に之を知つてゐるとは云へません。例へば靈魂といふものは、是は人間の生命と智慧の原である。一度肉を放れ去れば、(それは死と云つて、)後には冷く動かぬ石のやうな屍が残るばかりである、と我々は此位の事は知つて居りますが、併し、さて此の靈魂なるものが、如何にして肉體と結合し、如何にして肉體を生かしてゐるか、即ち必要に應じて口をきき、肢體を動かす得るのか、などと云ふ問題に至つては、迎も満足な回答をなすことが出来ぬのであります。丁度、時計の表面に現れる處の動く針と云ふ結果を見て、どうして此の針が動くのかといふ其の原因、即ち内部に隠された機械を見得ぬのと同様であります。土に落ちて、数十倍から百倍にも殖てゆく草木の種、或は又、亭々として天空を摩す松柏の大樹も、元に溯れば一粒の種にすぎなかつたと云ふ事など、我々は目に

見て此の事實を知つて居りますが、而し如何なれば斯くなるのかと云ふ事、即ち其の

生命の神祕

に關しては、どんな大學者と云へども是を闡明らかにする事が出来ません。學者等は其の巧妙緻密なる實驗研究に依て、我々以上に多くの事實を知つてはゐますが、併し彼等にしてても結局其の發見した結果を知るに止つて、其の根本原因を推究める事は出来ぬのであります。人間の智慧は、僅か一勺の土砂の分析にさへ多大の困難を感じてゐるでは有りませんか。それなのに何で量り知れない神の本性の奥義までを研究なし得ませうや。だから、我々は此の三位一體の玄義を了解し盡す事が出来ぬからと云つて怪む必要はありません。若し天主様の御啓示がなかつたならば、我々は此の玄義の有ることさへも知らなかつたでせう。で、要するに此の玄義は、よく分らなくとも、天主は眞實のものに在すゆゑ、我々はその御言を信ぜねばなりません。然り、たゞ信すれば好いのです。我々の救靈のためには堅く是を信すると云ふ、是だけで充分なのであります。我々は例へば

大洋を航海

する際、誰が一々其の海底を探り調べて居りませうか？ しかも平気で航海を續けてゐるではありませんか。事實、我々の周囲は分らぬことで満されてゐるのですから、宗教上に玄義が有つたとて、何の不思議もありません。神は玄義を以て、我々人間が其の小賢さを捨て、只管謙遜して天主の御言葉と其の御旨に服従すべきことを教へられてゐるのであります。



第二天使の事

附(悪魔の事)

聖書に「神は天に於て、無数の天使を作り給うた」といふ事が書いてあります。此の天使とは、人の靈魂のやうに、智慧と自由を具へた處の靈であつて肉體を有しません。即ち純靈體であつて、その性質が完全である爲、他の物質に依て、限定、拘束される事がないのであります。そして其の數は無数、而も其の間には種々の階級と、異つた職能があります。彼等は善良であつて不足なく、天國に在つて日々天主様に仕へ且つ之を愛し、永遠の福樂を得るやうに定められてゐるのであります。併し斯うした幸福を最初から受けたのはありません。天主様は、天使等を創造り給ふや、この福樂を與ふるに先だち、彼等に

一の試嘗

を課せられました。之は至極尤もな事でありませう。例へば、皇帝が或人に勳章をお與へに

第二天使の事 附(悪魔の事)

なるに云ふ場合、其の人は屹度國家に功勞があつたとか、或は君に對して非常に忠義を盡したと云ふ理由があるに相違ありません。若しさうした相當の理由がないとすれば、其の勳章は全く價値がないわけでありませう。事實又其れを受ける方にしても、自分の働きに依つて得たのでなければ、少しも名譽にならぬわけでありませう。何もせず親から譲り受けた財産よりも、自分が一生懸命に働いて得た財産の方が、どれ程尊く價値あるものか知れませぬ。で、天使達が聽て受けるであらう大きな褒賞を前にして、一の試嘗を越えねばならなかつたと云ふのも別に怪むに足らぬ事でありませう。さて、天主様が彼等大使に課せられた試嘗と云ふのは、どんなもので有つたか、我々は定かに之を知る事は出来ませんが、恐らく、天主様を認め、謙遜を以て是を崇め奉つると云ふ事であつたらうと思ひませう。天使達の性質は先に申した通り、至つて完全、善良なるものでありましたが、併し尙人と同様、自由と云ふものを持つて居りました。左に行かうが右に行かうが、或は或命令に従はうが、背かうが、其れは全く自由だつたのであります。乃ち、天使等は神の試嘗に對して

此の自由を如何に用ひたか。當然開かるべき天國の永遠の門を前にして、彼等は此の自由を如何に使つたでせうか。諸君、その結果は斯うだつたのです。即ち天使の中に

ル シ フ エ ル

と云つて大變美しく且つ勝れた智慧と能力を持つてゐる者が有りました。彼は、己が恵まれた才能と其の美しさをみて、何か自分は、他の仲間よりも一段と勝れたものであると思ふやうな、心にそんな自惚を起すやうになつたのです。そして自分の上に尙天主様の在すのを見ると、何だか之が甚だ嫉ましくなつてきました。そして彼は、自分も天主様のやうに成り度いと云ふ、其んな途方もない考を起したのです。そこでルシフェルは全天使の約三分の一を部下と頼み、「我は神に従はず、神の如きものとなるべし」と宣言して、とら／＼天主様に對して旗を翻したのでした。此處に於て残りの三分の二の天使等は、大天使ミカエルを頭とし、天主様の旗印の下に集つて、悪天使等と大いに戦ひ、遂に之を撃ち破つて、天國の外に追ひ出してしまひました。(この時のルシフェルに對する聖ミカ

エルの勝利を記念する爲に、今日、聖ミカエルの御影、御像には、みな、彼が剣を以つて龍を突刺して有様が表示してあります。我々は常に此の時の事を思ひ浮べ、悪魔の誘惑に敗れぬやう、絶えず之と戦闘つて、正しきにつくやうに心掛けねばなりません。この戦の時、天主様は善天使に力をかして、之に勝利を得させ給うたのですから、我々も誘惑にかゝる際、

天主の御祐助

に依らず、必ず悪魔に勝ち得るといふ事を忘れてはならないのであります。諸、天使達に課せられた試嘗は、此の戦によつて全く終結を告げました。彼等は其の與へられてゐた自由に依つて、各々勝手に自己の運命を決めたのであります。即ち天主様は御自分に従うて能く働いた天使等に對し、その手柄に應じた光榮をお與へになりました。彼等「善天使」は、此の後、愈聖に又幸福に確定められて、もう再び罪に陥るなどと云ふ事が出来なくなり、天國の福樂を己が永遠の遺産として戴くやうになりました。一方、

悪い天使等は、天國を追ひ出されて遂に悪魔と化してしまひました。今までの美しさは全く消失して見るからに怖い形相となり、その意志は悪に凝固つて、もう如何しても善を行ふことが出来なくなつてしまつたのです。痛悔を起す事さへ出来なくなつた彼等は、今や地獄に落ちて永遠の苦罰を受けてゐるのであります。

「善い天使」は、たゞ天國に在つて、天主の近側に仕へてゐるばかりでなく、その性質により、人を愛し、之を救ける任務を持つて居ります。人間の作られた目的の一は、悪天使等の失つた天國の空席を満たさうと云ふ天主の御考から出たものであつて、我々は斯うした理由から、天使等とは兄弟の如きものであると云ふ事が出来るのです。即ち天主様は

人毎に一人の守護の天使

をお遣しになつて居ります。如何な幼い子供でも、又山深い炭焼小屋の老爺さんにでも皆其々の立派な守護の天使が、つき従つてゐると云ふ事を考へて下さい。此の守護の天使等は、その兄弟分である我々を、無事に天國に引上げやうと、もう一生懸命になつてゐるの

です。數々の困難患苦に満たされた此うき世と云ふ天國への道中、其處には險阻な坂道や又、泥深い沼や池があつて我々を悩ましますが、併しどんな場合でも常に忠實親愛なる守護の天使が、我々を救け導いて呉れることを思へば、心安き哉ではありませんか。罪に陥らぬやう、悪魔の誘惑に敗けぬやう、守護の天使は何時にも正しい道を我々に教へて呉れます。疲るれば力をつけ、悲しい時には慰めを與へて、我々を絶えず勵ましてくれるのであります。もし我々が常に己が守護の天使の聲に耳を澄し、萬事之によく従つてゐたならば如何に幸福でありませう。然るに世には、此の有難い忠實なる侶伴である己が守護の天使に對して、随分無頓着な人が多いのです。何か肉身上の危険に遭遇すると、忽ち大聲を出して救助を呼ぶくせに、何故體よりも大切な

靈魂上の危険

に臨んだ時、彼等は此の力強い友に救援を求めないのでせう、この場合、熱心に其の援助を求め願へば、天使は直様飛んできて我々を守護して呉れる筈ではありませんか！ 無論

其の際、祈禱もせず、罪の便りも避けず、油断してゐたのでは逆も駄目です。そんな事で罪や禍に陥つても、其れは天使が悪いのではなく、罪は其人自身に有ると云はねばなりません。善天使が斯うして我々人間を善の方に導くのに反し、是と同等の力を持つてゐる「悪魔」は、我々を悪の方へと曳いてゆくのです。彼等は自分の罪のために天國の幸福を失つて居りながら、

天主様を逆恨して

之を亡きものにしようと思ふ、實に大それた考を持つようになつたので、遂々地獄の苦罰を招いてしまひました。悪魔は天國にゐる善大使をも恨めば、又、人間をも非常に憎んでゐます。人は悪魔に危害を加へたわけではなく、又加へることも出来ぬのですが、悪魔は自己の惡の爲に失つた天國の場所を、人間に奪はれるのを大層妬んで、たゞもう人間の靈魂を天國に入らせまい、之を地獄に陥れようと、其ればかりを考へてゐるのであります。こゝに一寸不思議に思はれるのは、何故天主様は、地獄の苦罰を受けてゐる悪魔に、

ク
レ
ド

此世を徘徊する自由をお赦しになつたかと云ふことです。是は他でもありません。天主様が人間を試しようと思召しで其の自由をお與へになつてゐるのです。即ち現世は我々にとつての試嘗の時代であると云はれるのは、この意に外なりません。悪魔は其れをいゝ事にして盛に人を惑さうとするのであります。たとへば、未信者を眞實の道に導かうとして御覽なさい。如何に其れが困難であるか。悪魔は、未信者を眞實の道に入らせまいと、尤らしい理由を並べ立て、百方は是を妨げるのであります。やれ是は外國の宗教だとか是を信すると、祖國に對し或は

先祖様に對して濟まない

とか、又、信者になると近所の人に悪く思はれたり、嘲笑されたりするやうになるかも知れぬとか、或は公教要理を學ぶのは六ヶ敷いとか、或は之は入り難い宗教であるとか、などと云ふ様々の考を起させるのは、之皆悪魔の爲業に外ならぬのであります。斯うして遂に地獄に陥れようとする悪魔の陥奔に、一體多くの人々は氣附かないのでせうか。ま

た、信者であつても此の悪魔の攻撃から逃れることは出来ません。否却て悪魔は未信者よりも一層深く是を憎んで、何とかして滅亡の道に陥れようと躍起となつてゐるのであります。何と云つても悪賢い悪魔です。あれやこれやと種々巧妙な手段を廻すのですから、信者たるものは餘程注意せねばなりません。何とか理由をつけて、日曜日の務を怠らせた

悪魔の陥奔

り、未信者の行爲をするやうに勧めたり、聖會の掟を非難させたりするなど、皆是悪魔の誘惑であります。斯うした悪魔の犠牲になつてしまふ信者も亦、少くないではありませんまいか。何卒諸君は、天主様の援助と守護の天使の力に依頼り、十二分の注意を以つて、この怖し

を避け、無事に其の救靈を得られるよう、お祈り致します。

第三 萬物創造の事

(特に人の事に就いて)

天主様の創造られたものを區別して二の種類に分ける事ができます。まづ靈に屬するもの、即ち無形なる天使と、次に有形のもの、即ち地球、太陽等の物質に屬するものであります。そして天主は是等二のものを同時に作りになりました。聖書に依りますと、天地創造のために六日間を要したと誌してあります。無論この六日間といふのは、只今の廿四時間を一日とする六日ではありますまい。恐らく長い長い間の歲月の一期間を指したものであらうと思はれます。兎に角、天主様は其の第一日目に一言で光をお造りになりました。第二日目に、天主様は蒼穹、即ち此の地球、太陽、星の懸つてゐる處をお造りになりました。

第三日目には、この地の上を覆うてゐた水を一所に集めて海と陸とをお造りになりました。同時に河川もできて地面を濕すやうになり、其處には草や木、其他種々の穀物類が生ずるやうになつたのであります。

第四日目には、晝現れる太陽、夜出る月、星などをお造りになりました。そして是等の運轉する軌道をも、矢張り其の時ちやんと限定になつたのですが、その秩序は今日に至るまで些少の狂もなく見事に保たれて居るのであります。

第五日目と第六日目に當つて、天主様は、水の中を泳ぐもの、空を飛ぶもの、又、地上には種々の動物をお作りになりました。

斯うして天地萬物が愈々出來上つたのですが、この天主様の御仕事の立派な事、そして完全な事は誠に譬えやうもありません。殊に此の地球は、きら／＼と輝く太陽に照され、至る所、花咲き鳥歌ひ蝶は舞ひ舞ふと云ふ、恰も美しい

御伽噺の國

第三 萬物創造の事 (特に人の事に就いて)

を見るやうな有様でありました。處が此の御伽噺の國には、未だ主人と云ふものが有りません。丁度それは王様の無い國か、或は司祭の居ない御堂のやうなもので有つて、總ての生物に命令を下し、之を掌る者が居らなかつたのであります。そこで天主様は、地上に在る一切のものを司るために、頭領として人間を造らんものと思召されたのであります。

聖キリゾストームの言葉

「母親は、その子供が生れる際には、先づ蒲團とか着物などの必要な物を準備するものであるが、天主様も其れと同様、永遠なる愛の御心の中に人間を抱いておいでになつて、是に幸福を與へたいと云ふ思召しだつたので、この愛の傑作たる人間を作り出すに當つては、先づ是が爲に結構なる住所を準備して置かれたのである」とありますが、誠に然り、天主様は、人間の住所としてお造りになつた此の地上の一切のものを、美しく秩序正しく整へてから、始て其れら總ての動物、鳥、魚などの主人として、人をお造りになつたのであります。先づ最初に作られた人は則ちアダムでありました。天主様は、御自分の御姿に

像つて人をお造りになつたと云はれて居ります。即ち天主様は先づ少しの土を以て其の形を作り、是に智慧と生命の素である處の靈魂を吹入れて、こゝに始て一個の人間をお作りになりました。それで我々人間は、二のもの即ち靈魂といふ無形の靈と、有形の肉體といふものから成立つてゐるのであります。肉體とは、吾人の目で見、手で觸れる事の出来る物質的形體を具へたもの、即ち頭とか、手、足などが其れであり、又靈魂とは、吾人の内に在つて、不斷無形の作用をしてゐるもの、即ち何かを考へるとか、望むとかいふ智的動作言ひ換へれば

肉體を活し、活動させる原動力が是靈魂

なのであります。

人の體は、地上に於て作られたものゝ中、最も勝れた立派なものであります。種々の動物の體を御覽なさい。皆四本の足を具へ、頸は地面の方を向いてゐませう。然るに我々人間は如何ですか。是とは全く相違つて、直立して居り且つ其の目は常に上を天を望んで居

第三 萬物創造の事 (特に人の事に就いて)

ります。諸君、之は全體何を意味してゐるのでせうか？ 外ではありません。是は即ち、人間は天より出て、再び又天に還るといふ事を示現してゐるのであります。然し此の肉體が、我々にとつて最も大切、價値あるものとするのは誤であります。如何程他のものに勝れてゐると申しても、結局是は一の物質であつて、幾分か他の動物に近い、類似點の有ることは否めない事實であります。殊にこの肉體は、種々の機械のやうに、時日を経ると漸次に古くなり、破損し易くなつて、何の用にも立たなくなるといふ所謂

老 衰

して、再び又元の土に還つてしまはねばなりません。然るに、我々の靈魂は如何かといふに、是は天主様の御姿に像られたもの、即ち單一、無形のものであつて、永遠に消滅することの出来ないものであります。誠に此の靈魂こそ我々にとつて最も大切なもの、寸時も忽にするのできないもので有ります。

諸、創造主たる天主様の御手に依て、人間が此の地上に出現されたのですが、最初はただアダム一人でありました。彼は語るに其の伴侶なく、子孫を残すなどといふ希望は無論ありよう筈がなく、且つ天主様より享けてゐる處の數々の恩恵や賜物等を、共に分ち悦ぶといふ事もできなかつたのであります。乃ち天主様は「一人なるは善からず、我彼に適する助手を彼のために作らん」と思召され、アダムの熟く眠つてゐる時を覗ひ、其の肋骨を一本取り出し、其を以てエワといふ女をお造りになり、是を彼に配されたのであります。目覺めて是を眺めたアダムは非常に喜び、「是こそ吾骨の骨、吾肉の肉である」と申しました。

不信心で、聖書の話など云ふと一笑に附してしまふ人はいざ知らず、我々少しでも正しい信仰を持つてゐるものは、この物語りを讀むと、本當に染々した氣持になるのであります。誠にこれ程尊い有難い事實が又と有りませうか。

此處に注意せねばならぬ事は、天主様がエワをお作りになるに際し、先づアダムの體の一部分から（其の骨を取つて）是を作り給うたと云ふことであります。この事は即ち夫婦

と云ふものが、一の體、一の肉であつて、一生涯離れる事の出来ないものであると云ふこと、即ち

婚姻に依て繋がれた夫婦の縁

と云ふものは、如何なことが有つても分離できないものだといふ事をお教へになつたものであります。次に天主様は、この時、人間社會に於ける女の位置をもお定めになつたのであります。即ちアクウキノの聖トマスは「天主様が女を作らうとするに際して、其の骨を男子の頭部より取り給はなかつた。是は即ち女子は男子を支配すべきでない」と云ふ事をお示しになつたものであり、又、其の足部より是を取り給はなかつたのは、女子は決して男子の奴隷ではないといふことをお教へになつたものである。そして女子は、男子の心臓に最も近い肋骨を以て作られたと云ふのは、是即ち男子は女子を、己が配偶者、友人として、之を我身の如く愛さねばならぬといふことを現示されたものである」と云つて居りますが、誠に然り、世の人々が、この眞理にさへ従つて居れば、此の頃喧しい男女間の問題

など、全く其の影を絶つてありませうに……。

今を去る數千年前、我々人類の元祖たるアダムとエワは、斯うして此の地上に出現したのであります。諸君は、時に此の人の出現といふ、其の當時の有様に思を馳せて見た事がありますか？ 其の頃未だ此の地上には智慧を有するものがなく、従つて話をなし得るものが居なかつたので、四邊は誠に森閑としたものであります。處が或日この静寂な、そして美しい花園の中に、突然人間といふものが現れ、「おゝ我が父よ！」と叫んで、その創造主たる天主様を呼び奉つることが出来たと云ふ、この人類史上に唯一度よりない

人類の發祥

と云ふ事に考を及ぼすと、我々は深く感動致さざるを得ないのであります。

さて、肉體と靈魂とを合せ備へてゐる人間は、二の世界に存在してゐるといふ事ができます。即ち我々は靈に屬する天使等の世界と、物質界とを兼合せて持つてゐるのであります。そして又、人間はこの物質界に於ける最高の位置を與へられて居り、他のものは總て

第三 萬物創造の事 (特に人の事に就いて)

皆、我々の爲に作られてゐるのであります。其れら一切のものは、人に仕へ、人の爲に働くこと云ふ、即ち凡て我々に從屬してゐるのですが、併し之は決して我々が是等のものを己がものと爲すとの意味ではありません。是等のものゝ最後の目的は、矢張り天主様であります。一切のものが天主様より出たように、其の榮を又天主様に歸するのは、誠に是當然の結果と云はねばなりません。

抑人間がこの

地上の頭首

と定められた理由は、一に此の點、即ち世の萬物を眺め、之を讚美し、その榮を天主様に歸するといふ事に係つてゐるのであります。生命なく智慧なき世の萬物は、我々に向つて「自分等は、己が造主に對して相應な尊敬を呈する事は出来ません。即ち自分達は、神を認めようとしても智慧がなく、之を愛しようとしても心と云ふものを持つて居りません。又、祝福しようにも言がなく、禮拜せんが爲には悲しい哉、意志と云ふものを持たないの

です。自分達の頭首である諸君は、何卒、この哀れな我々に代つて、天主様に尊敬の意を表して下さい」と斯う願つてゐるやうなものであります。それ故、我々は天主様に擇ばれて、地上の首領と生れてきたことを感謝すると同時に、一切のものゝ名に依り、又、我々の名の爲に、天主に最上の禮拜を盡さねばなりません。我々が現世に生れてきた目的は、誠に此の點に存するのであつて、決して富を積んだり、權勢を得たり、或は又、種々の空しい世の快樂に耽つたりする爲ではありません。其んな果敢い忽ちにして過ぎてゆく事を追ひ求めて一體何になりませう。我々

人間の眞の目的

と云ふのは、即ち天主様を認め、愛し、是に奉仕するといふ事是であります。そして又、此の事は、我々人間に負はされてゐる義務であると云はねばなりません。この義務を好く果す時、我等は生存の眞の意味に適ひ、又、其の目的を全うしたと云ふ事が出来るのであります。

第四 人祖墮落の事

純靈である天使達は天に於て作られ、我々物質的肉體を具備へてゐる人間は、此の地上に於て生存するやうに作られました。一體親と云ふものは、何人でも其の子供に全く目のないもので、若し自分が廣い土地でも持つてゐると、まづ其の最も好い場所を選んで家を建て、其處に子供が不自由なく生活できるやうに、種々と心配してやるものであります。これと同様、天主様も人間を住まはすために、たゞ地上を興へ給うたばかりでなく、特に地上に於ける最も立派な場所を擇んで、其處に最初の人間であるアダムを置かれたのであります。其處が即ち

樂園

であります。是は如何な處であつたか、今日明瞭でありませんが、多分非常に美しい廣々

とした花園であつたと思はれます。四時花咲き鳥は歌ひ、山の容、川の流に至るまで、皆其々の美しさを以て装はれてゐると云ふ、其處は誠に平和境であつたに相違ありません。種々な獸が居ても、其の性質は皆温順で、人に害を加へないばかりか、却て克く一々其の命令に従つて居りました。その上、何等勞する事なくして地は自から食物を生ずるといふ、斯うした結構な境遇に彼等アダムとエワは置かれてゐたのであります。彼等は其の肉體に何等の病苦艱難をも受けなかつたと同様、其の靈魂上にも聊の恐怖、心痛など云ふ事を知りませんでした。實に斯うして彼等には死ぬと云ふ事さへなかつたのであります。併し諸君、この最上の幸福と思はれる程の生活も、總て彼等が受くる筈の完全なる生命、即ち天國に於ける永遠の生命に比較するならば、是はほんの其の準備の如きものにすぎないのであります。元來人間は、天上の福樂を享ける爲に作られたもので有りますから、暫時此世に生活した曉には、何の苦痛もなく、靈魂は肉體を持つた儘天國に上り、天使達と共に限りない天主様の祝福を受け、極みなく終りなく生くる筈だつたのであります。

した。

世の親といふもの

は、非常に子供を愛し、其の幸福の爲めには如何なことでも喜んでするものであります。天主様も人を大層愛して居られたので、出来得る限り是が爲めに盡し給うたのであります。

さて、諸君も既に御存知のように、彼の大使達は、天國の幸福を受くるに先だつて一の試を課せられたのですが、彼等の多くは其に能く堪へて己が忠實を天主の尊前に立證したので、遂に其の幸福を贏ち得たのであります。アダムとエワも是と同様、其の福樂を分けて載くに當つて或一の試を経ねばならなかつたのです。そして、それは一の誠を守ると云ふことであります。即ち天主様は、彼等二人に樂園をお與へになつた時斯う仰せられたのです。「此の中の總てのものを汝等の心の儘に委すが、併し唯一つ、其の眞中に在る樹に生る果實に限り、決して是に觸れてはならない、食べては勿論不可のである。

若し此の誠を破つたならば、汝等には死の罰が下るぞ」と堅く是を戒め給うたのであります。この樹と云ふのは即ち

善惡を識別するの木

と名付けられたものであつて、是により我々の先祖は、天主に對して眞に忠實なりや否やを試されたのであります。この我が人祖の受けた試は、決して六ヶ敷いものではなく、要するに唯一つの樹に觸れねば宜しかつたのです。何も好んで其んな樹の實を食べなくとも、樂園には外に澤山の美味い果實があつて、其等は皆自由に採つて食へることが出来たし、然も此の禁令をよく守れば更に大きな幸福が與へられ、若し是に背けば恐しい刑罰が下されるといふ固い御約束が有つたのですから、アダムたるもの其の誠に當然唯々として従ふべき筈でありました。諸君も御存知のやうに、はじめアダムもエワも誠に善なるものに作られて居りました。但し天使と同様、彼等も自由と云ふものを與へられてゐたので、惡に隨はうが又善を爲さうが、其の判断は彼等の自由意志に任されて居つたのです。この

第四 人祖墮落の事

自由が一部の天使等にとつて躓であつたように、我が人祖にとつても大きな

悲みの因

と成つてしまひました。即ち一の試を前にして、永遠なる天國の福樂を擇ぶか或は恐しい苦罰を招くかと云ふ此の二の間に立つた時、彼等は無論、最初の間は忠實に其の戒を守つてゐたのですが、どうした事か仕舞にとろく天主の禁令に背いてしまつたのです。禁斷の木の實を食べて自己の爲にも、又、延いては其の子孫の爲にも恐るべき罰を招いてしまつたのであります。約束を守ると云ふ事、是は決して六ヶ敷いことではないのです。併し何分にも人間の心といふものは變り易く、時々其處から、とんだ、間違が起るのであります。即ち是は人間に自由意志と云ふものが有る爲であつて、わが人祖も畢竟惡魔の勧誘に因て是を悪用してしまつたといふ次第なのです。諸君も御存知のように、惡魔といふ奴は、自己が天國に於て失つた場所を、人間に占められるのが悔さに、非常に我々を妬み、怨み、百方手を盡して、我々の幸福の邪魔をするのであります。アダムとエワが、

非常に

天主様の御寵愛

を受けてゐるのを眺め、聽ては、もつとく大きな天上の福樂をも與へられるであらう事を思ふと、惡魔はもう凝として居れず、何とかして是を罪に陥れてやらうと、種々工夫して、好い機會の來るのを伺つて居りました。即ち人間に近づき易くするために、惡魔は蛇の形に姿を變へて、竊に樂園の中に入り込み、彼の禁斷の木の上に登り、丁度、羊を待ち伏せる狼のように、彼等二人の心の隙を狙つてゐたのであります。處が或日、ふとエワが此の木の側を通りかゝりますと、惡魔は好機逸すべからずと云ふわけで、早速彼の女に向ひ、馴々しく話しかけるのであります。其の頃の樂園には、今で考へると、随分不思議に思はれる事が種々行はれてゐたもので、この蛇の聲を聞くと云ふ事も、別に不思議ではありませんでした。さて、エワは、この蛇が、恐しい企圖を持た惡魔の化身であるとは夢知らず、うつかり是と言葉を交してしまつたのです。何氣ない風を装ふて蛇は、

第四 人祖墮落の事

「貴方は、この樂園の中に有る種々の木の果實を、何でも採つて食べられるようだが、故此の木だけには觸れようとせぬのか」と云つて尋ねました。エワは答へて、「それは天主様の禁じ給ふ處であり、且つ其の誠を破れば、死と云ふ罰まで定められてあるからだ」と申しました。すると蛇は「否々そうではありますまい。この木の實を食べたとて何で死ぬものですか。いや却つて是を食べると忽ちにして智慧の目開け、善と惡とを完全に識ることができて、神よりも、もつと／＼伶俐なものとなる筈です。それだから、神は是を食べるのを貴方等に禁じたのですよ」と誠に言葉巧みに申すのでした。斯うした言葉を聞いてエワたるもの、「直に是は惡魔の惡勸告である……と判斷なし得た筈であります。天主様には、決して嘘偽と云ふものが有る筈なく、又、人を瞞着などと云ふ事をなさる筈がないのですから、若し其の御言葉に對して疑惑を起したり、反抗するような心になるのは、其れは則ち惡魔の爲業であると云ふ事を、誰しも氣付かねばならぬ筈であります。併し遺憾ながら、エワは此の點を少しも考へなかつたのです。そして彼女は、巧みな惡魔の

言葉に何時しか迷はされてしまひました。若し神のやうになれたならば、どんなに善からうと、其んな傲慢心を起して段々神の言葉を疑ふようになり、そして、さう思ひながら、この木の實を熟々眺めてゐると、それが非常に美しく甘さうに見えてきて、もう怵へ切れなくなり、遂に其の一を採り、是を口にしてしまつたのであります。諸君、斯うして、と／＼エワは、天主様の嚴重な禁戒に背いてしまつたのであります。この罪を犯すと、エワの心には直に大きな不安の念が兆してきました。始て悪い事をしてしまつたと氣付いたが、もう致し方がない。斯うしようか、あゝしやうかと種々氣を揉みますが、なんとも解決の致し方が有りません。そこで人が罪を犯した時、よくするように、自分の

罪の仲間

を作らうと、彼女は遂にアダムを唆かして、己が惡事に引き入れてしまつたのです。即ち彼女はアダムの側に行き、其の果物の一を彼に手渡して申すには「私は、只今この果實を食べましたが、別に何の害も受けません。これは屹度蛇の云ふやうに、神のやうに善惡の

分別が明かになるのかも知れませんが」と申しました。何としたことでせう。此の時アダムは、一方にはエワの心配を慰めるため、又一方には、己が位が上つて、神の如く成れるものなら、さうなりたいたいものだと言ふ傲慢心も手傳つて、とうとう此の果實を食べてしまつたのでありました。

諸君、是が人祖墮落の梗概であります。アダムとエワは斯うして天主様の禁令に背いてしまいました。彼等は是から、先に天主様の定めて置かれた、あの嚴罰を受けねばならぬ事になつたのであります。



第五 人祖墮落の結果 (一)

アダムとエワが、とうとう斯うして天主様の誠に背き、あれ程確く禁ぜられてゐた木の實を食べてしまふと、忽ち天主様は、彼等の眼前に現れて、其の罪を厳しくお咎めになりました。するとアダムは其の罪をエワの所爲にしてしまひ、エワの方は是を

蛇の所爲

にしてしまつて、一向自分等の悪い事を認めず、たゞ徒に是が辯解をなすのみで有りませんでした。この際、彼等二人は當然主の御前に平伏して、深く其の罪の赦免を願ふべき筈であつたのに、悪に魅入られたとでも云ふのか、一向さうした悔悛の色をみせなかつたのであります。全く何とした事だつたのでせう。彼等の此の言譯は無論なんの力もありません。否却つて其の罪を益々重くするようなものであります。若しこの場合、その犯した

罪を甚だ遺憾に思ひ、謙遜して眞實に其の罪を痛悔し、告白し、其の容赦を願へば、天主様の御怒を和げ、その大なる慈悲を招き得たのでせうが、今は何とも致し方有りません。彼等は豫定通りの天罰を、遂に蒙るやうになつたのであります。彼等は先づ楽しく幸福満ちた樂園を放逐されてしまひました。もはや、天主様から戴いてゐた種々の有難い賜物を享けることが出来なくなり、汗と塵に塗れながら、骨折り苦んで其の日の糧を得るといふ昨日に打つて變つた

辛 楚 い 生 活

をせねばならなくなつたのであります。

次は死の罰。天主様は其の義に由て、直にでも彼等に是を與へる事ができたのですが、何分彼等は我々人類の親となるべきものであつたゆゑ、暫時是を差控へられました。そして、其の間に種々の艱難辛苦を舐め、聽て老衰して不自由な生活をなし、遂には病氣して死んでしまふやうに取計らはれたのであります。抑天主様の人祖をお造りになつた目的

は、樂園に何時までも是を置くためでなく、又、無論此世の爲でもなく、實に天國の爲、即ち是に永遠なる福樂をお與へにならうと云ふ目的だつたのであります。彼等人祖は、天使と違つて、靈魂に肉體をも合せ備へてゐましたが、矢張り天主様の子供たる關係にたつ者、即ち其の遺産たる天國を嗣ぐ筈だつたのであります。然るに何たる事ぞ、彼等は罪を以て、天の御父に對し、丁度、放蕩息子のやうな悪い行爲をしたものですから、天主は(忿怒た父の如く)彼等の爲に設けられてゐた遺産たる天國を取り上げ、其の子供たるの關係を絶ち、天國の門を閉ざしてしまはれたのであります。一見この罰は餘りに苛酷すぎる様に思はれますが、又、事實厳しい罰であつたに相違ありませんが、然し一步退いて能く其の時の事情を考へてみますと、是は全く義に適つた罰である、と云はねばなりません。即ち人祖の罪は、明かに、天主様の命令違反であります。斯うしてはならない、此の誠を破れば斯ういふ罰を與へるぞ、との仰せを、よく承知しながら犯した罪ですから、天主様も是をお容赦になる餘地がありません。一國の皇帝が一の法律を定めて、若し是に

違反する者があれば、死刑に處するぞと御命令になつた場合、若しこの法律に背くものがあれば、其の者は當然死刑に處せられる筈であつて、誰も之に異義を挾む者はありません。で、アダム等が其の定められて有つた苦罰を受けねばならなかつたのも、是れ當然のことでもあります。何と云つてもアダム等の罪は、其の受けてゐる數々の恩惠、賜物、或は有難い天國を與へるとの御約束に満足せず、感謝する事をせず、僭越至極にも、もつと高い唯一なる天主の御位を奪ひ取らうとしたのですから大變です。是を譬ふれば、丁度、或皇帝が人民中の或人を擇んで、其の國最高の位に上げた場合、其の人は大いに皇帝の

知遇に感じ

赤心こめて忠勤を勵むべき筈であるのに、どうした事か其の人が少しも此の大なる恩惠に満足せず、祕密裡に計畫して王位を奪はうと云ふやうな怖しい謀叛心を起したと云ふに、よく似通つたものであります。勿論アダムに於ける罪の重さは是等の比ではありません。無から作り出されたと云ふ小さな卑しい被造物の分際で、其の造主たる唯一全能なる天主

様の御位を得やうと望んだのですから、その罪の大きさは全く量知れないのであります。儲、アダムとエワの罪の罰は、彼等のみに留つたのではなく、實にその子孫たる我々人類一般の者の上に傳はりました。我々が日々被つてゐる種々の禍害、困苦などの多くは、みな此の人祖の罪に起因してゐるのであります。親の悪事の結果が、その子供にまで報ひられるといふ事、是は世間に於て、よく見受けられる事實であります。例へば或村に一人の盗人が有つたと致しませう。村の者は皆彼を忌み嫌つて、とう／＼是を村から追放したと致します。この際、盗人の家族たる妻や子供は、別に何の罪を犯さなくとも、やれ

盗人の子よ！

妻よ！と云つて、村民から種々の侮辱や迫害を受けて、迎も其の村に居住できなくなるものであります。或は又、島流にあつた罪人、これが若し其の謫居に於て子供を生んだ場合、此の子供には何の罪がなくとも、矢張り其の親と同様、丁度罪人のやうに其處で種々の苦を受けねばなりません。我々人間も此の通りです。その大親たるアダムが天主様に

背いて受けた種々の報ひを、さながらに頂戴せねばなりません。言はばアダムは、樂園を追はれて此世に島流になつたやうなものであり、其處で我々を生んだのですから、我々は彼等同様の苦い生活を甘んじて受けねばならぬのであります。

斯うして現世は、人祖の犯した罪に由つて、苦の世と變じたのであります。無論天様の御憐愍に依つて、苦の現世にも尙多くの楽しみや幸福が残されては居りますが、併し是を初の樂園時代に較ぶれば、又何といふ相違でせうか。何等勞せずして、衣食住に事足りてゐたものが、今は一生懸命、身を粉にして働かなくては、其の日の糧をも得られなくなりしました。然も時々旱魃が續き、暴風雨が起り、或は洪水が有つたり、又は害虫などの爲に、折角苦心して作つたものが、一朝にして無に歸してしまふやうな事も度々起るやうになりました。それに又、彼の樂園に在つては、一切のものが皆人に克く従ひ、自由にして使役なし得たのに、今では其の大部分が我々の敵となつてしまひ、其れを防ぐ爲に我々は却つて己を守らねばならぬやうになつてしまつたのです。又、樂園に在つては、人の智

慧明らかに、徳勝れ、其の心は常に平和、安心、喜悅の情に満ち溢れて居りました。其の肉體も亦非常に立派な頑丈なもの、然も不滅のものだつたのです。然るに今はどうですか。心には種々の悩み苦みが絶えず、體は甚だ纖弱いものとなつて、嚴寒酷暑には直ぐ弱つてしまひ、又、種々の病に罹つて大きな苦痛を受けねばならなくなりました。智慧の目は暗み、徳は衰へ、死も又否み難い運命となつて、誠に脆く果敢く、又、不完全極るものとなつてしまつたのであります。又、女は男を誘つて罪に陥れたので、格別の苦罰を受けねばならなくなりました。例へば分娩の苦などを受けねばならなくなつたのです。斯うした種々の苦を受けて、愈この世を去るといふ日、我々は最後に臨終の死の悲を受けねばなりません。最初不滅の筈だつた體が、終に

蛆虫の餌食

とならねばならなくなつたのです。諸君、是等が人祖の罪が齎らした處の、肉體上の罰でありました。

第五 人祖墮落の結果(一)

第六 人祖墮落の結果 (二)

天主様が我々人間をお造りになつた目的は？是に天國の福樂を與へんが爲でした。丁度子供が其の父の側に在つて幸福を受けるやうに、我々は應て天主御父の御側へ行つて、其處で永遠の福樂を受けんが爲に作られたのであります。それでこそ天主様が人間をお造りになつた際、是を御自分に象り、幾分か御自分にお似せになつたと云ふ理由が了解ります。そして、天主様は是に天使同様の清く美しい靈魂をお與へになり、且つ成聖の聖寵を以て是をお飾りになつたと云ふのです。此の成聖の聖寵に依て人間は天國に入るべき天主の愛子たるの關係が成立つたのであります。

肉身の親は、其の子供をみて、己に克く似たもの、己が肉身の一部分だとも考へる處から、是を深く愛するのであります。併し一方、人間が神より出たものとは云つても（是は

人と人との場合のやうに）神の體內から生み出されたのではなくて、實に無から創造されたのでありますけれども、人間は、成聖の聖寵の靈妙なる作用に因て、靈魂を非常に美しく尊くする事が出来、剩さへ

神の面影

を受けて、是に其の眞の像を映し出す事が出来るのであります。そこで天主様は、成聖の聖寵を持つてゐる人間の靈魂上に、御自分の面影——其れは誠に潔く美しく尊いもの——の有るのを御覽になる時、人間は御自分の體から出たものではなく、單に是は其の造り給うたものに過ぎませんが、然も是を御自分の子供程の位置に擧げ給ふのであります。丁度其れは養子として貰ひ受けた子供を、非常に愛し、是に全財産を與へやうとする人の心のやうなものであります。諸君、天主様は斯うして人間を、其の子供のやうに愛し給うたのであります。それ故我々も、天主様に對しては、君に對する人民としての愛ではなく、又、朋友に對するやうな愛でもなく、丁度、子供が其の親に對して有する處の愛をもつて

せねばなりません。さて斯の様に人祖は全く神の養子の如きものとなつたのであります。人の性質に超えた位に擧げられて、天使等と兄弟のやうなものになり、

天國の相續人

たらしめられたのであります。従つて其の肉體なども非常に立派なものであります。我々同様に（人祖の肉體も）矢張り五感其の他の部分から成立つては居りましたが、其れは實に完全なもので、病氣などは絶対に罹りませんでした。それに此の肉體は死すると云ふ事がなく又、成聖の聖寵に因て、一切邪惡と云ふことを知らなかつたのであります。肉體が靈魂の命令によく従つてゐる有様は、丁度、忠實な下僕か、或は能く馴された處の柔順い家畜のやうでありました。今日のやうに、肉體が靈魂を誘つて惡に陥れるなどと云ふ事は全然なく、身も心も皆一樣に善の方に向いて居つたのであります。天主様に仕へ其の誠を守り、善事を行ふのに、何の困難も感じなかつたと云ふ。諸君、是が我々人類の元祖、アダムとエワに與へられてゐた處の幸なる有様でありました。若し彼等人祖が

此の儘でゐて呉れたら、其の子孫たる我々も亦、當然此の幸福を受くべき筈であつたのです。處が事實は之に反し、遺憾至極にも元祖等は、天主様に對して謀叛を企てた爲、忽ち此の得難い特權を失つてしまひ、子孫たる我々にまで醜い其の罪の結果を残すやうになつたのであります。アダム等は其の罪の罰として、第一にその成聖の聖寵を取上げられてしまひました。靈魂を包んでゐた處の天主様の像りの其の美しかつた面影を、すつかり失つてしまつたのです。同時に今迄肉體を支配してゐた靈魂は、

全く其の統御力を失つて

しまひ、假令靈魂が善を行はふとしても、肉體が少しも之に従はないようになつてしまひました。それどころか時には靈魂を誘つて種々の惡事を無理に強ひるやうにさへなつたのです。七の罪源と云つて恐しい毒虫のやうなものが、其の時以來人の心に巢ふやうになつたのであります。斯うして人間の靈魂は、天主様の目からみると、丁度、癩病患者の醜惡な肉體とか、或は又、垢脂に汚れた體を襤褸に包んでゐる乞食を見るのと同様になつて

しまひました。人の親は、己が家に自分の子供ばかりを入れて、他の者を顧みるものではないありません。人祖の罪の結果、天主様はもう人間を己が子供と認められなくなりました。罪の爲に人間の靈魂は全く悪魔の奴隷となつてしまつたので、天主様の目には、人間は其の敵の如きものとさへ映るようになったのです。今やアダムは、天主様の子たる位を失ひ天の御父の遺産を嗣ぐの權利を剝奪され、天國には如何しても入り得ぬ者となつてしまひました。

河の源泉が苦くなれば

其處から流れでる河の水は凡て苦くなります。之と同様に、アダムと云ふ（罪を犯して聖寵を失ひ、心に怖い罪源と云ふ惡の竈のやうなものを持つようになつた）人祖から出でる我々人類は、皆此の罪の汚れ即ち原罪てふものを背負つて生れてくるのであります。例へば、流刑に處せられた罪人の子供等のやうに、我々は天主様の御許を遠く離れた僻地に苦み悩むでゐると變りありません。言葉を換へて云へば、我々は全く悪魔の捕虜とな

つてゐるのです。罪に罪を重ね、偶像崇拜とか種々の迷信に流れてしまつた今日、たゞ地獄の苦罰の外は何ものをも持つことが出来なくなつたのであります。

處でどうしたものか、世の多くの人は此の不幸な我等の状態に就いて、少しも考へる事をしないのです。畢竟彼等は我々を見棄て給うた處の天の御父の事を知らず、又、我々の失つてしまつた天國の榮福の何たるかを辨へないからであります。丁度其れは

乞食が一向其の身分を恥とせず

街の中を平氣で歩いてゐるのと同じやうなものです。諸君、實に情無い次第では有りませんか。

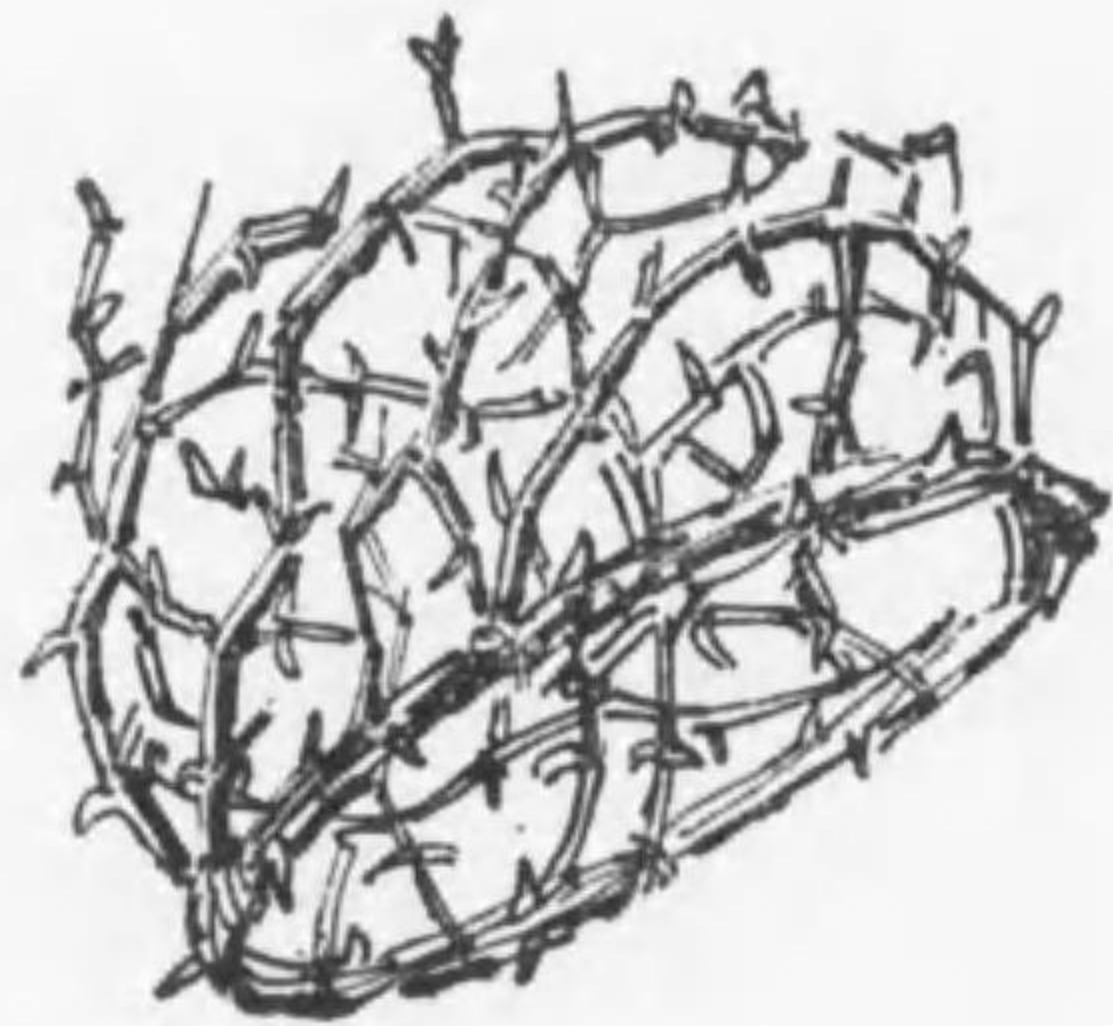
尙自ら顧みても分かる事ですが、我々の心の内には、實に嫌な憎むべき思とか望が随分深く根を張つてゐるのに氣が付きます。そして是等の惡草は、隙さへ有れば直様芽を出さうとするので、我々は是を抑へるのに、非常に氣をつかはねばなりません。少しでも油斷をすると忽ち生長して、身を損ね、人を害する處の怖い果實——曰く不正、不義、虚偽、

闘争、邪淫、怨恨と云つたような實——を結ぶやうになると云ふ誠に悲しむべき有様であります。是皆、人祖の原罪の結果に外なりません。今更何と云つても取り返へしがつきません。それが、それにしても、悪魔にうか／＼囁かれた人祖、

その傲慢と意志薄弱

の故に途方もない罪を犯してしまつた人祖の事を考へると、實に残念で詮方ありません。斯うして我々人間は、今や何の希望もなく、永遠の地獄に陥るべきものとなつてゐるのせうか。天主様の義には寸分の容赦も有りません。罪と名の付くものは悉く皆罰し給ふのが天主様の義であります。併し又、此處に我々は天主様の限りない御慈悲の御心の事を考へねばなりません。丁度、放蕩息子を家から追出した親が、其の息子の事を始終氣づかつてゐると同じように、天主様も罪を犯した人間を罰し給うたとは云ふものゝ、決して是を棄て給うたのではありません。即ち天主様の慈悲、憐憫の御心は、遂に救世の御事業となつて我々の上に顯れたのです。時來つて其の御獨子耶穌基督を此世に降し、是を人

類全體の身代りとして其の罪を贖ひ、天主の義を満足せしめると同時に、我々を悪魔の手から救つて、元通り天國の相続者たるの權を返して下さつたのであります。



第七 聖母マリアの事

若し人間が勝手に其の母を擇び得るものとすれば、我々は必ず最も己が心に叶ふ者を選ぶに相違ありません。即ち出来るだけ完全無缺なもの——美しく、徳勝れ、富、権力の申し分ない人——を擇ぶに相違ないのです。無論我々は左様な自由を有しません、併し全能なる天主様にあつては、當に是を撰び給ふ事が出来るばかりでなく、又自ら其の御意の儘に是をお作りになる事さへ可能なのであります。即ち天主様は此世に降つて人と成り給ふべく思召された時、まづ其母となるべき人をお擇びになりました。嘗てアダムに對して

「惡魔の頭を踏み碎く女

を後に遣す」とお約束になつたのは、則ちこの天主の御母たるべき人を指してゐるのであります。實に天主様は其の頃から既に己が母たるべき者を、胸中に描いて居られたのであ

りました。數多い女の中から、天主様が己の母としてお擇びになつたのは誰であつたか？ 言ふまでもなく其れは我が聖母マリア其人であります。天主様は聖母マリアを、御自分の母たるに相應しくお作りになりました。即ち溢るゝばかりの聖寵を以て是をお飾りになつたのです。我々は聖母マリアの純清な御心を呼んで「黄金の堂」「象牙の塔」などと譽め稱へて居ります。一分の汚れもない其の御體、清淨潔白なる其の御心、其れは丁度光り輝くダイヤモンドが、純金の中に鑲められたやうな有様でありました。何と云つても天主様の御母であります。天主様が、是を被造物中最も尊く、美しく、聖にして又勝れたるものにお作りになつたのも決して不思議ではありません。

其の昔、天主様は惡魔に向つて斯う云ふ事を仰言つて居ります。即ち「女は汝の頭を踏み碎く筈である」と。是は聖母マリアが惡魔に對して、全き勝利を得給ふ筈であると云ふ事を豫言されたものです。聖母マリアは、先づ人を救ひ、人を惡魔の權力より引放し給ふ處の我が救主耶穌基督を此世に生ませさせ給ひました。即ち惡魔は嘗て女を使つて人を滅

第七 聖母マリアの事

亡に陥れたのですが、天主様も亦一人の女聖母マリアに依て、人を救ひ、悪魔にうち勝つやうに致されたのであります。

次に聖母マリアは、其の

原罪なくして被孕り給ふ

た事を以て、全く悪魔の権力を逃れる事が出来ました。一體我々人間は凡て皆、原罪でふものを持つて生れてくるのです。丁度、是は癩病のようなものであつて、生れ乍らにして我々は其の血即ち靈魂の美しさを汚されてゐるのであります。何分にも我々は、大罪を犯した爲、その聖寵を剝ぎ取られて、此世に島流になつたアダムの末裔ですから、皆が皆乍らその額に罪の極印を捺されてゐるのも致し方ありません。それに我々は自罪でふ罪を重ねに重ねますので、今や全く悪魔の権下に釘附けられてしまつたような有様になつて居ります。幸にも天主様の慈悲よりする耶穌基督の救世の大業の功力に因て、我々は此の罪の淵から救はれて、再び天主様の子となる事が出来るのですが、併し我々は一時の間でも悪魔

の權下に居つたと云ふ事實を消すことは出来ません。即ち其の罪の赦免は得ても、罪の源泉である

邪 慾

てふものが、我々の心の中に残るのであります。

聖母マリアは、其の兩親なる聖ヨアキンと聖アンナの間に生れになつたのですから、矢張り我々同様アダムの子孫であります。それ故、普通なれば彼女も亦原罪を持つてお生れになる筈でしたが、併し天主様は、己が母となるべき人を一瞬たりとも悪魔の權下に置く事をなさいませんでした。即ち聖母マリアは天主の思召しに因て、全く原罪の汚れを逃れ給うたのです。其の母の胎内に被孕り給うた其の瞬間から天主は絶えず彼女と共に在して、終生悪魔が是に近づく事をお許しになりませんでした。即ち原罪の汚れを持つて居られませんでしたから、一般の人のやうに邪慾でふものをお感じになる事なく、其の一生涯全く罪でふものを知り給はなかつたのです。潔く正しく、そして美しい其の御徳を稱へて

我々は聖母マリアを「正義の鑑」と呼び、是を曇らない鏡に譬へ奉つて居ります。

聖母マリアが悪魔に對して得給ふた處の勝利は、種々の御繪や御像に依て記念されて居ります。諸君は、聖母マリアが

天主の御子たる基督を抱き

足下に蛇の頭を踏みつけて居る處の御繪や御像を御覽になつた事がありませう。此の蛇と云ふのは悪魔の像りであり、蛇が其の口に銜へてゐる果實と云ふのは、嘗て樂園に於て人間を滅亡に導いた處の所謂禁斷の木實であります。即ち是は聖母マリアが、原罪なくして被孕り給うた事と、其の汚れない御生涯を以て、完全に悪魔に勝ち其の頭を踏み碎き給うたと云ふ其の有様を表したものであります。

一體人の母となる事は誠に望むべき事でありませう。世に子供の自慢をしない母が有りませうか。殊に其の子供が人々から尊敬せられるやうになつた場合、其の母たる人の誇りは如何ばかりでせう。誠に子の名譽は母の名譽であります。或一國に於て、最も尊敬すべき

御方は、申すまでもなく皇帝であります。其の次に尊敬すべき御方は、皇帝の御母でなければなりません。何故なれば、國中の人は皆その皇帝を尊敬するのに、その皇帝御自身は其の御母を敬ひ愛さねばならぬからであります。天に於ても又地に在つても、天主様より尊い御方はありません。天主様は天地萬物の創造主であつて、一切の人間、聖母マリアをもお作りになつたのであります。併し被造物中では、聖母マリア程尊いものは何處にも見出す事が出来ません。何と云つても天主の御母です。造物主の御母です。潔く尊く、萬物を挺で、高く擧げられ給うたのも是當然の事と云はねばなりません。誠に聖母マリアは天地の元后であります。又、天使の元后、太祖の元后、證聖者の元后、

一切の信者の元后

であります。聖母マリアの上には、たゞ耶穌基督と、天主御父と聖靈とが居ますばかりであります。それ故、我々信者は、聖母マリアを深く敬愛致さねばなりません。如何程是を深く愛し敬ひ奉つたとて過ぎると云ふ事がないのです。たゞ此處に間違つてならないの

は、天主様のみ歸すべき拜禮を以て、聖母マリアに對してはならないと云ふ事です。聖母マリアが如何に尊いとは云へ矢張り天主様より作られたものにすぎません。凡ての恩恵と云ふものは一切天主様からのみ出るものであると云ふ事、聖母マリアの持つて居られた種々の優れた徳、聖寵などは皆天主様より與へられたものであると云ふ事を知らねばならないのです。即ち我々が聖母に向つて祈り頼むと云ふのは、天主様への仲介人となつて、其の善き執成を求むるのだと云ふ事を忘れてはなりません。



第八 耶蘇基督の事(一)

(萬民の王にて在す事に就いて)

『又其の御獨子、我等の主耶蘇基督、即ち聖靈に因りて孕り、童貞マリアより生れ』

天主様は其の始なく了なく永遠に在す御もの、他の一切のもの、根源にあらせ給ふ故、何物からも名付けられ給ふべき御方ではありません。宇宙萬物、有と凡有一切の物の創造主にして且つ是が主宰者であらせ給ふ故、我々は、是を假に天主即ち天の御主、或は世界の創造主と呼び奉つて居ります。併しこゝに天主様が、人と成つて一時我々と生活を共になさると云ふ場合に際しては、どうしても我々同様の御名が必要でありました。普通我々人間は、生れると直に其の親から其の名を付けられるものですが、併し天主様に在つては御自分で其の名をお撰びになつたと云ふ即ち其の御托身、御誕生に先だつて、一位の天使

第八 耶蘇基督の事(二)

が其の御母たる聖マリアに現れ、其の名を告げたと云ふ、事の次第を諸君は聖書でよく御存知のことと思ひます。時として人は、非常に意味の深い名を付けられる事もあります。併し人間と云ふものは其の名通りに成功したり、長生したりすると限つたものではありません。處で天主様は此世に降り給うた時、たゞ他人との區別を目的として名を付け給うたばかりでなく、之を以て御自分の何ものなるかを明らかに世に示し給うたのであります。即ち天主様は其の御降誕、御死去に因て、耶蘇言ひ換へれば

救主てふ名の意味を完全に實行

成就されたのであります。耶蘇様には尙基督と云ふ御名が有ります。前者は人性に於ける御名、後者は其の御位の名であります。耶蘇と云ふ名は、天主様がアダムに御約束なすつた處の女より出る救主、世の人々の待望んでゐた處の救主、總ての人の救靈を得さしむる爲に來た處の救主などの意味を現してゐるのであります。

さて、此の天主様の萬世に冠たる其の聖なる御名に對して、我々は最上の敬意を拂はね

ばならないのは是當然の事であります。處で、天主様が現世に降つて我々に接し給ふ有様は、嚴然として秋毫も許さぬ世の皇帝の如くではなく、恰も愛兒の許に走せ來る親のやうに、其の尊敬を受くるよりも先づ我々の愛をお求めになつたのであります。それ故我々は「天に在す我等の父よ！」と斯うした親しくも亦懐しい言葉を以て、天主様を呼び奉つる事が出来るのであります。耶蘇とは即ち此のわが父の御名故、常に大なる尊敬と心よりする愛と信頼心とを以て此の御名を呼び奉つらねばなりません。殊に必要なる場合に臨んでは尙然り、耶蘇は「これより凡て我名に依て求めよ、我名に依て願ふ處の一切の事は受けらるべし」とまで仰せられてゐる事を忘れてはなりません。それ故、聖會は祈禱の終に當つて「わが主耶蘇基督によりてアーメン」と誦へる事を教へ、又、毎朝の祈禱には、耶蘇の御名の連禱を誦へるやうに定めて居ります。我々は、よく聖會の獎に従つて、艱難、禍患、危険、誘惑に遭遇する時には、直に耶蘇の御名を呼んで其の御手に絶るやうに致しませう。そして此處に一つ、耶蘇の御名を呼ぶ時には屹度聖母マリアの御名をも附加へる

事を忘れてはなりません。

耶穌！ マリア！

と日に幾度でも、丁度幼子が、朝から晩まで己が父母の名を呼び続けるように、呼び奉るのが好いのです。殊に臨終には、此の御名こそ我々の最後の希望でなければなりません。現世を去るの日、最後まで此の二の御名を呼び続ける者の、未だ嘗て其の救贖を失つた事がないと云ふ。諸君、何卒よく此の一事を考へて下さい。

耶穌基督は其の名は救主でありますが、又同時に我々の主であります。聖書に「是故に神も亦之を最上に擧げて、賜ふに一切の名に優れる名を以てし給へり、即ち耶穌の御名に對しては、天上のもの、地上のもの、悉く膝を屈むべく、又、凡ての舌は父にて在す神の光榮の爲に、耶穌基督の主にて在せる事を公言すべし」とあります。誠に然り、我々も其の絶大なる權能に對して、盡すべき尊敬を呈し奉つらねばなりません。即ち我々が祈禱をなす際には、耶穌基督を呼んで「我等の主よ！」と申して居るのであります。斯うして、

耶穌基督が我等公教信者の主たる事は申す迄もありません。信者は皆、我が神、我が救主として是を認め且つ信じて居ります。即ち日々誦へる望徳誦を御覽なさい。「基督の功徳に因て、其の約束の如く、我に終なき生命と、是を得べき聖寵とを、必ず與へ給はん事を望み奉つる」と、我々が耶穌様に對し奉つる態度を明かに云ひ表して居ります。併し基督を認めない、其の教理、掟を拒む處の未信者、異端者等に對しても、耶穌基督は矢張り眞正の主であらせられます。

基督の一言一行は凡て萬人を目的

とされたのでした。何人も太陽の熱と光から逃れ得ぬように、我々は天に於ても、地に於ても、基督の支配を逃れる事が出来ないものであります。

耶穌基督のお立てになつた眞實の宗教、——天主様は此の宗教に依てのみ、人々よりの尊敬を受け度い思召しであり、又實際此の宗教のみ、人々に救贖を得さしむる事が可能であると云ふことは、天主様が人間に對して明白に命じ給うてゐる律法であります。併し多

くの人々は耶蘇基督を己が救主なりと認め、其の宗教は唯一絶対なりとして是を遵守し、基督を己が主として尊敬する事を拒否するのであります。それに又此の宗教に入つても、我儘の爲放だいをして、一向其の掟や教理に従はない人も、ちよいと有りますが、而も天主様は、其れ等の人を見棄て給はず、尙日に種々な賜物を、他の人同様、分け與へて居られるのであります。彼等は斯うした天主様の寛大なる處置をいゝ事にして、益々勝手な生活に流れ、少しも其の誤つた状態を直さうと致しません。信者の行爲を、頭から嫌つてしまつて改心しようなど云ふ氣持は、露程も持ち合はさないのであります。さう云ふ怪からん彼等を放て置かれるのを見て、基督は誠に力ない御主だと云ふ人も有りますがそれは大分見當が違ひます。彼等は、此世の王を見る目で基督に對する處から、其んな誤謬を生ずるのであります。即ち此世の王様は、たゞ人間の肉身上に關する事、財産とか名譽などの上に權利を持つてゐるのですが、耶蘇様は實に我々の靈魂と心とを治めて居られるのだと云ふ事を考へなくてはなりません。世の王様は人民から租税を取り立てますが、

基督様は靈魂の寶である處の愛を我々に求め給ふのであります。前者は其の人民を物質的繁榮に導くに反し、後者は我々を救靈の道へ導き給ふのであります。此世の王様は、納税し、法律に従ふ事を命じ、若し是を承諾しない時には、腕力を以てゞも其れを要求すると云ふ、それぐらひな處が關の山であります。が、耶蘇基督は我々に其の十誠と聖教を示して、是を守る事を命じ且つ御自分に對しては、誠心よりする唯一の禮拜を呈すべき事をお命じになつた代りに、御自身は、あの傷しい死を以て、萬民に靈魂の救かりを得させ給うたのであります。諸君、この一事が、我々をして、他の一切を措いて、たゞ天主様を愛するようになすの所以なのであります。天主様は我々を深く愛し給ふ處からして、其の神たる稜威を卑しい肉體の下に包み隠し、たゞ貧窮と弱さの中に、丁度、慈悲深い父が其の愛子の許を訪れるように、我々の中に降り給うたのであります。そして其の愛の如何程大いなるかを證據立てる爲に、あの御一生涯を通じての苦み、迫害、終には

悲惨な十字架上の死

第八 耶蘇基督の事(一)

を擇び給ふたと云ふ、我々は此の事を思へば、どうして耶蘇様を愛さずにはおかれませうや！ 耶蘇様は誠に其の御苦難、御死去に依て、我々にたゞ御自分を愛する事と、それに因て各人其の救靈を得るようと云ふ、是のみを求め給うたのでありました。處で、この人を愛するとか愛せぬとか云ふ事は、全く其の人の自由意志に由るのであつて、人が如何に愛される事を望んでも、相手が嫌だと云へば、もう夫れまでのものです。併し親が其の子供に對して、己を愛することを強ひないからと云つて、子供たる者、親に對する孝養の務を怠つていゝと云ふ法がありませんか。又、天主様は人に對して、遙に己を愛する事を望み給ふのみで、何等それが爲に特別な手段を用ひ給はないからと云つて、我々は耶蘇基督を認めず、是を愛し奉つらなくともいゝと云ふ法がありませんか。否々其れは誰が考へても大なる罪に違ひありません。成程今は、御自分を愛する人、愛せぬ人に對して、主は殊更變つた態度をお採りになりませんが、併し何時までもお棄て置きになるわけではありません。萬物の王なる耶蘇様は、何時の日か、其の全能に依り、天に於ても地に於ても、

總ての人々の上に、其の大なる權能を顯し給ふ筈であります。諸君、常に記憶せねばならぬ事は、聽て我々の上に行はれるであらう處の私審判及び公審判に就いてであります。即ち現世は我々にとつて、試練の時であると云ふ事、此世に生きてゐる間に、我々は基督を擇ぶか、惡魔につくか、或は愛に生きるか不忠實を擇ぶか、又は救靈の道に精進するか、滅亡の道を探るか、この何れかを擇ばねばならないと云ふ事、そして此の試練の時は死に依て終末を告げると云ふ、其の時、我々は今有してゐる處の自由なる意志を剝奪れてしまつて、人は各自の此世に於ける行爲、信仰、所業に依て裁かれねばならぬと云ふ事を忘れてはなりません。死後直に行はれる此の裁を私審判と云ひ、天主様の尊前に出て、我々は此世に於ける行爲の些細な點に至るまで問ひ糺されるのであります。即ち主に對して忠實であつたか？ 其の御教を良く遵守したか？ と。又、未信者に對しては、何故御教を拒んだのか？ 汝等の爲を思へばこそ、我は耐へ難い困苦を凌ぎ、許し難い屈辱を忍び、果ては十字架上の悲惨な死までを擇んで、救靈の業を敢行したのに、何故汝等は最後まで此

の尊い犠牲を拒み通したのか？と言葉鋭くお訊ねになるに相違ありません。

耶穌基督の堪忍

が、現世に於て限りないものであればある程、反撥的に此の審判の時に於ける其の義が非常に宥め難いものとなる筈ではないでせうか。で斯くして、主は、御自分に忠實を盡し、愛を以て奉仕した人々の靈魂には、其の報賞として直に天國を與へ給ふ筈であり、又、小罪があるとか、或は罪の償を果してない人の靈魂には煉獄を與へ、又、大罪を犯して居つたとか、甚だ主に對して冷淡だつた者とか、或は頑迷な未信者の靈魂には、永遠の地獄の苦罰を與へ給ふ筈であります。次に、何時か此の世界の終る日、天主の全能に依つて、我々の靈魂が再び元の肉身と合して復活せられる時、耶穌基督は、再び萬民の前に現れ給ふと云ふ、其の時は嘗て此世に現れ給ひし時の如く、弱く貧しく又力なく、苦む者としてではなく、却つて太陽よりも光り輝き、雷よりも怖しく、無数の天使を扈從させられて一切の人の善惡を裁かん爲に、其の王たる限りない威嚴を具へて我々の前に立現はれ給ふ

筈であります。そして、世の最初からの悉皆の人々を、一人残らず其の尊前に呼び出して善人、悪人を公に裁判致される筈であります。是を公審判と名付けるのですが、此の時善人の靈魂は肉身もろ共、耶穌と俱に天國に上り、其處に於て天主様の限りない寵愛を受くるやう永遠に決定される筈であり、又、悪人の靈魂は肉身もろ共、地獄の深淵に投棄てられて、終なき苦罰を受けねばならぬと云ふ、我々は此の事に想ひ至る時、どうして世の人々のやうに平氣で居られませう。

さて諸君、幸に我々は基督信者となり、耶穌様を、我々の王、我々の救主、我々の神として認めて居ります。言ひ換へれば、耶穌様に擇ばれ、格別に其の愛を受けてゐるのであります。併しそれで我々は安心してしまつては駄目です。常に心して、耶穌の御旨に叶ふやう、即ち基督信者としての徳を、愈々高く積むやうに努力せねばなりません。

有名無實

と云ふ、即ち信者となりながら、一向信者たるの生活をしないならば、折角信者となつた

第八 耶穌基督の事(一)

甲斐がないわけです。隠れた罪を以て、己が心を穢しながら、表面だけ如何にも信者らしい様子を装ふてゐると云ふ、そんな怪からん事が何處にありますか。耶蘇様は我々の靈魂に最も重きを置き、常に我々の心の奥底まで御覽になつてゐるのだと云ふ事を忘れてはなりません。即ち我々は影日向があつてはならないのです。人が見て居らうと、見てゐまいと、自分の家であらうと、外であらうと、常に心身共に眞實の信者として恥ぢないだけの覺悟が必要であります。天主様に對してなす處の誓、約束、或は公衆の前で行ふ處の慈善の業、或は又、心の中の痛悔、嘆きに至るまで、凡て眞實から出たものでなければなりません。先にも申したように、耶蘇は我々の心中を御覽になつてゐるのです。苟にも私には信者だ、耶蘇のものなんだ、だからもう救靈は大丈夫であるなどと、變な自惚を起すやうな事があつてはなりません。我々は常に小心翼々として、些少でも主の御旨に背く事を恐れ、只管善き信者となるやうに勵み努めねばならないのであります。

第九 耶蘇基督の事(二)

(神性・人性を兼ね具へ給ふ事)

先に耶蘇基督は唯信者に王たるばかりでなく、實に萬民の王であると云ふ事、どんな人でも此世に於ては、基督を己が神、己が主として、之に心から服従致さねばならぬと云ふ事、そして、若し其の權能を無視し、之を尊奉する事を拒むならば、死後の審判に於ては必ず其の行爲に應じた處罰を蒙らねばならぬ筈であると云ふ、是等の事に就いてお話を致しました。即ち基督は眞實の神である、故に一切の物、凡ての人の御主であると云ふ事に就いて申し述べたのです。併し基督は斯うして本當の神であらせられると同時に、又眞實の人間であらせられたと云ふ、即ち基督は人性をお受けになつた處の天主様の第二位に在したと云ふ事に就いては、諸君既によく御存知の事と思ひます。

さて、此の人性を構成する處のものは必ず二つ即ち靈魂と肉體であります。靈魂とは無形なる靈體、是は生命、智慧、判斷、意志、記憶などを備へて居り、肉體は有機物であつて、手に觸れ、目に視ると云ふ即ち肢體と五感（視、聽、味、臭、觸覺）などを具へて居ります。靈魂は直接天主様より作られたものであり、肉體は其の親から生ずると云ふ即ち丁度草木が種から生ずるやうに、この肉體は親の胎内から生れ出るものであります。そして、此の人性をなす爲の二つの要素即ち靈魂と肉體とは甚だよく合致してゐて、逆も我々の目で識別する事は出来ません。それは恰も光と熱に於ける關係のやうに、是と其れとは全く一物となつて居るのであります。言ふ迄もなく靈魂は肉體の生命の原、肉體はたゞ是に行使されてゐるにすぎません。故に靈魂の肉體を離れ去る時、これを死と云つて、其處に一個の人性が即ち人間が消滅するわけであります。是に依て、我々は靈魂、或は肉體のみでは、人間即ち人性を形成し得ぬ事を知るのであります。次に神性即ち神の性に就いては、我々被造物の身を以て、逆も是を完全に悟り得るもの

ではありません。たゞ此の神性は全くの靈體であると云ふ事、神性は神性自身の内に在して、始なく元もなく却つて他の一切のものに其の初を興へ給うたものであると云ふ事、然も唯一絶體、全智全能、何處として在さぬ處がないと云ふ事、又、其の内に在る三のペルソナは、各々同性質、同體で唯御一體の神をなしてゐると云ふ、我々は是くらゐの事しか悟り得ぬのであります。

で、耶蘇基督の性質、是は如何なものかと云ふに、公教要理にも誌されてあるやうに、基督は眞實の神であると同時に又眞實の人であると云ふ、即ち

人と成り給うた神

であります。神性、人性を兼ね備へ給うた御方であります。處で或物になるには、其の物の性質を有さねばなりません。果して基督の中に其の神であると云ふ神性と、人間であると云ふ人性を認め得るでせうか。諸君、耶蘇基督は、肉體と靈魂とを持つて居られましたから、どうしても眞正の人間でなければなりません。即ち御體は其の母聖マリアの御胎

内より生れ出たのですから、我々の肉體と同様のものであり、又其の靈魂は、他の人間同様、天主様に依て作られ、肉體に合致されたものであると云ふ、こゝに於て基督は、矢張りどうしても完全なる人間でなければならぬと云ふのです。誠に基督は、我々の様に生れ、生き、食し、話し、又、我々同様にお働きになつたのでありました。次は其の神性に就いてあります。即ち基督は神の性質を所持し給うたかと云ふに、然り然り、耶蘇基督は完全なる神の性質、神の體を有し給うたのでありました。それは如何にしてあつたか？ 聖母マリアが、基督の御體を御懐胎になつた時、天主は靈魂を作つて是に合致させ、且つ其の上三位一體の第二位、即ち天主の御子を下して是を其の人間たる肉體及び靈魂の上に堅く結合させ給うたのであります。即ち此處に人間にして神なる耶蘇基督なる御方が出来たのであります。我々仁者は、三位一體のペルソナが各々獨立した體を具へてゐるのではないと云ふ事、又、三位の中の一は、神の體の一部を具へてゐるのではないと云ふ事、又其のペルソナは、三とも悉く同じ神の體を持つてゐるのだと云ふ事など、よく知つて居る

處であります。即ち

第二のペルソナがこの基督の人性に合致

したと云ふのは、神の性質全部が、この基督といふ人性に一致した事でありました。故に耶蘇は全く本當の神であると云はねばなりません。又、斯様にも説明できませう。即ち、我々人間は、二のもの、肉體と靈魂とより成つてゐて、他に何物をも持つて居りません。基督様もです、矢張り人間を成す處の此の二のものを具備し給ふ故、我々同様の人間であり、若し彼にして之以上の何物をも具へ給はなかつたとしたならば、もう問題でなくなつてしまひます。然るにです、耶蘇は、實に／＼もう一のもの、即ち神の體と其の性質を明確に具備し給うてゐたのでありました。故に基督は、本當の人間であつたばかりでなく、又同時に眞實の神に在したのであります。併し此世に於ける三十三年間の一生涯を通じて耶蘇基督は、其の輝く神たるの稜威を、全く其の人性の下に蔽ひ隠して居られました。外觀上に於ては、全く我々同様、一個の人間として生活し給うたのであります。一般の人

間を深く愛し給ふ處からして耶蘇は、此世の王様のよ様な威嚴や榮華を望み給はず、却て貧窮の中に生活して、自由に世の多くの人々に接し給うたのでありました。それは丁度、或る慈悲深い王様が、下々の人民の生活状態をよく知らんが爲、又且つ是を救助せんが爲に、粗服を纏うて、唯一人の供人も従はせず御微行なされる事が有るやうに、耶蘇様も此の俗悪の世にお出で下すつたのであります。處で斯様の状態であつたのならば、人々は如何して基督の神たる事を察し得たか？

と云ふ疑問を抱く人があるに相違ありません。是は外でもない、我々が我々の靈魂を認識し得ると同様に、其の神にて在す事を知り得たのであります。即ち我々の靈魂は肉體の下に隠されてゐて、之を見る事は不可能でありますが、併し我々は其の作用に因て、其の存在を悟る事が出来ます。基督の場合も、外觀上に於ては普通變りない一個の人間としか認められないが、併しその生涯を通じて行ひ給うた數々の奇蹟が、其の神性を充分證し得て餘りあるのであります。

基督教は天主様に依て啓示された唯一の宗教であります。天主たる耶蘇基督に依て建てられたのでありますから、是は如何しても眞實の宗教でなければなりません。誠に耶蘇は普通の人間ではなかつた、神たるの權威を持つて來られた其の御名も基督であつた事を忘れてはならないのです。實際こゝに何の權威もなくして大事業を興さうとしても、それは結局徒勞に終るに相違ありません。宗教などの問題に關しては、尙更然りであります。一國の法律、是が若し其の國の主權者に依て發布されたものでなければ、其れに何の効能もないやうに、宗教も矢張り神より出たものでなければ、全く其の權威と云ふものがないのであります。然るに我主耶蘇基督は、眞正の神に在した故、其の建て給うた處の宗教も亦神より出た眞實の宗教でなければなりません。何度も申し上げますが、諸君、これこそ何處までも眞實の、偽りない、唯一の神より發した處の宗教であると云ふ事、基督はたゞ是一つをお立てになつたのだから、是こそ誠の宗教であると云ふ事をよく承知して戴き度いのであります。

世間には宗教と名のつくものが随分澤山あるやうです。そして其等は、表面はなか／＼立派に見えますが、結局人間の手に成つたものにすぎませんから、どうしても眞實の宗教と申す事が出来ません。諸君、人間は誠にわが天主教に依てのみ其の救霊を得る事が出来るのです。この宗教を知りながら、然も一向是を求めようとせぬ人は、迎も救霊を得る望がないと云はねばなりません。



第十 偽りの宗教

未信者の中には、種々の人物を神として、是を拜禮する人が有ります。其のやうな人の目には、基督教の神で有る處の耶穌基督も、矢張り其等の人物同様、一個の人間であるとしか映りません。従つて彼等は、日本人でない人物を日本に於て奉戴するのは過つてゐる、日本には日本の偉い人物が澤山有るのだから、何も西洋の人物までを神に入れる必要はないと主張するのであります。又中には、天主教に入るのは、畢竟

外國人に誘引れてゆく

のであつて、是は己が國の傳統的美風を破壊するものであると考へてゐる人も有るやうです。勿論若し耶穌基督がたゞ普通の人物、有名なる外國の一人物にすぎぬのならば、彼等の此の考へも決して誤つて居りませんが、併し事實は大いに是と其の趣を異にするので

ク
レ
ド

あります。さて、如何な國へ行つても、其の國民が敬慕してゐる處の大人物とか、大偉人と云ふものが必ず有るものです。我々は同國民として其れ等の人物を尊敬し記念するのは誠に結構な事、大いに譽むべき事であり、且つ又、之は其の義務でなければなりません。併し乍ら、是等の人物を神として禮拜し、眞實の神に對してのみ許されてゐる處の禮拜を彼等に歸すのは、之は大變な誤謬であると云ふ事を諸君も屹度お認めになると思ひます。それには是は兎や角云ふまでもない、常識から考へてみても甚だ判明り易い事實と云はねばなりません。又、諸君は其れ等の人物に對する、拜禮の範圍などと云ふ事に就いて御注意なされた事がありますか。即ちさういふ人物を神として取扱ふのは、全く其の自國に限られたものであると云ふ事、此の神と崇められてゐる人物は、日本とか支那とか各々其の限られた一國の人物であつて、若し是を外の國にもつてゆき、他國人に神として認めさせ、且つ禮拜せしむる事は到底望み得ないことであると云ふ事、斯うした人物を本尊とした宗教は、丁度或る地方にのみ限られて生ずる植物のやうなものであつて、若し是を他の地方

に移植しようと骨折つても直に枯れてしまふやうに、

其の人物の出生した國を出ては

迎も育ち得るものではないと云ふ事に就いてお考へになつたことがありますか。で、此處に暫時く耶蘇基督を、單なる人間であり、一國に於ける通常の偉い人物に過ぎなかつたと假定致しませう。さすれば必ずや他國人は、彼を一外國人なりてふ名の下に敬遠したに相違ないのです。若し耶蘇に對する禮拜を、他國人に強ふるならば、彼等は不満の色をなし「耶蘇何ぞ、彼はユダヤ人のみ、故に宜しくユダヤ人のみ是に關與するが良からう」と云ふに相違ありません。事實又、道理上から考へても、それは左様あらねばならぬ筈だつたのですが、併し實際に於ては如何だつたでせうか？ 即ち諸君も御存知のやうに、ユダヤの國は、あの通り滅亡んでしまひ、一方世界の各國は何時の間にか皆耶蘇を認め且つ彼の建てた宗教を戴いて立派なカトリック教國となつてしまつたのです。今や世界の津々浦々に至るまでカトリック信者の居ない所、或は天主堂の建てられて無い場所は全く無い、と

云つてもいゝ程になりました。

太陽を神としてゐた人民

もありました。或は偉い人物を神として禮拜してゐた國民も有りましたが、一度我公教が傳はるや、彼等は斷然と己が國神を棄て、是に對する禮拜を止めて、耶蘇を奉戴き、耶蘇の宗教を守るやうになつたのであります。是は全體何の爲か？ 如何なれば基督教が斯ういふ力を持つてゐるのか？ 問題は此の點であります。

其の理由は云ふ迄もない、矢張り耶蘇は、たゞの人間ではなかつた。誠に耶蘇は、世界の救主、眞の神、三位一體の第二のペルソナに在して、其の建て給うた宗教は、唯一眞實なる神の宗教であつたからだ。信ぜざるを得ません。成程人間としては、耶蘇もユダヤ人であるが、併し神としては凡ての國のもの、總ての時代、一切の人類のものであります。それは何故か。耶蘇は眞に世界萬物の創造主ではありませんか！ 何處の國へ行つても、耶蘇基督は外國人では有りません。それこそ

普天の下卒士の濱

行くとして基督の領地にあらざるなく、基督の住民にあらざるはないのであります。尤も此の耶蘇の我々に王たるのは、現世の王様對我々の關係の如くではありません。即ち此世の王様は、我々の肉體上に關する事を治める權利を持つてゐるのですが、耶蘇は實に、萬民の心を治め給ふ王なのであります。従つて其の立て給ふ處の宗教は、各々の國の政治とが習慣、風俗などには全く關係致しません。それ故、公教信者に成つたからとて、別に國民として變化するわけではないと云ふ、即ち此の宗教を信じたからと云つて、その國の習慣や義務に差支を生ずるやうな事は、絶対にないのであります。基督の曰ふやうに、神のものは神に返し、皇帝のものは皇帝に返さねばなりません。我々は靈的に、精神的に眞實の神を認めて是を禮拜し、其の御掟に従つて其の禁忌給ふ事、即ち罪、惡、偶像崇拜、迷信などを避けると云ふ事に何の差支がありません。罪を避け、

迷信を棄てる

第十條の宗教

などといふ事が、何で國家の義務や習慣に背くものですか。諸君、わがカトリック（是を舊教と譯すは誤で、この字は普遍的、或は萬世的と云ふ意なのです）と云ふ語の示すやうに、是はヨーロッパの宗教に非ず、アメリカ或はアジアの完教にも非ず、誠に天より降つた處の萬國萬代の宗教であります。例へば世界中を照す彼の太陽、我々は何處に在つてもその光と熱から逃れる事が出来ないやうに、天主様が世界萬民の上を照し暖ため給ふ其の御手を、何としても逃れる事ができません。然るに異教人等の宗教觀は、全く之とは相違し、各國には皆それ／＼異つた其の國特有の宗教が有るものと考へて居ります。即ち、日本人は日本の宗教を、支那人なら支那の宗教を守らねばならないと考へてゐるのです。それ故若し自國の宗教を棄てる人があると、甚だ怪からぬ行爲であるかのやうに是を非難し、又、若し外國人にして己が國の宗教に入る者でもあれば、是亦大變不合理な事であると彼等は考へます。それに又、世間には、種々な宗教、例へば神道だとか佛教だとか或は天理教、大本教などと是等を一人で同時に二つも三つも抱いてゐる人がよく有ります。そ

れ等の人の心は是が爲に、常に分裂、動搖して少しも安定を得ないのですが、併し何人も是は道理に叶はぬ事、正しくない事であるとして排斥することを致しません。「宗教なら皆同様である、だから何の宗教に入つたからつて、何の差支もないぢやないか」と、是が

世の所謂もの知り

の宗教觀なのであります。誠に困つた話で、其んな土臺の坐つてない信仰は、いざと云ふ場合、どんなに頼りないものであるかと云ふ事に、彼等は氣付かないのでせうか。人物や動物を神とする宗教、或は種々の迷信などに就いて考へて御覽なさい。彼等は、其の宗教なり迷信の起因する處、或は其の擴つた理由等は少しも考へず、たゞ人が爲す儘、いふが儘に其れを受け、信じ、行つてゐるのです。果して其れに信すべき理由があらうか、或は眞に頼むべき根據があるだらうか、などの問題に關しては少しも是を考慮する事なく、彼等はわけもなく其れに入つてしまふのであります。彼等は眞面目に考へると云ふ事を致しません。何でも好い加減に誤魔化してしまふと云ふ、其れが人間の最も伶俐い處世法だと

ク レ ド
 思つてゐるのです。従つて彼等は、人間とは何處から来て、何處へ行くのか、何の爲に此世に生れてきたのかなどと云ふ問題に就いて、説明しやうとでもすると直に笑つてしまふのです。知らうと云ふ氣がないから、何時迄たつても解らない、

解らないから迷ふ

と云ふ是致し方ない結果であります。それ故、何か一寸好い事でもあれば馬鹿に乾燥ぎ、一寸困つた事に出會ふと、もうすつかり悄氣てしまふと云ふ誠に心細い有様であります。丁度、暗闇の中を、何の當もなく彷徨してゐる人のやうなもので、彼方に行つては突當り、此方へ来ては蹴躓き、彷徨してゐる中に、遂々泥深い池になんか落込んでしまつて、身動きも出来なくなつてしまふと云ふ實に氣の毒な状態であります。然るに我カトリック信者にあつては如何か？ 何と云つても天主様より示された唯一眞實の宗教を遵奉してゐる彼等です。どんな問題に出會つても恐れませぬ。周章てませぬ、世の人のやうに無意義に迷ひ悲む事を致しません。公教信者は幼い時から其の教理を詳しく教へられて居りますから

どんな問題が起つてきても、ちやんと是に對して正しい解釋を下す事が出来るのです。人間は如何して生れ、又何處に行くか、其の目的地たる天國に達する爲には、どんな方法を採らねばならぬかなどと云ふ事に關しても明白に教へられて居りますから、假令過つて倒れる事があつても直に起き上がる手段を知つて居ります。疑惑ひませぬ、狼狽ませぬ。丁度眞晝の大道を足取り確に潤歩する人のやうに、

安心して人生の行路を

一步步進む事ができるのであります。

歴史を繰ると、昔から随分種々の宗教が有りました。曰くエチプト教、バビロニヤ教、アツシリヤ教、ロシア教など、數ふるに違ない程であります。併し是等偽りの宗教と云ふものは、丁度、乾燥し切つた沙漠の中に植た木のやうなものであつて、其處に居る人が、其の木に水を與へてゐる間は生きてゐるが、さて其の人が、何かの都合で何處かに行つてしまふと、忽ち其の木は枯れてしまふと云ふ。即ち其の宗教を建てた人が亡くなり、その

人に附加し熱狂した人が去つてしまふと、其の宗教も自然に消滅しないまでも必ず弱つてしまふのでありました。是に反して我カトリックは如何であつたか。之は丁度、水量豊かな河の側に植られた木のやうなものであります。天主様に依て植られた此の木は、どんな災難を受けても枯れるどころではない、愈々枝を張り根を張つて今日に及んだのであります。諸君も御存知のやうに時々大暴風雨が起つて、此の木の枝は折られ、葉は撈りとられると云ふ、即ち時の暴君の手に依て、信者等が惨酷な目に遭遇つたり、異端者の

恐しい迫害

を受けたりした事も有りましたが、此の木は其んな事で萎縮するものではありません。否却つて益々丈夫な枝を張り、新たな芽を延して、今や澤山の美しい實を結ぶやうになつたのであります。噫この公教の木の蔭に憩ふ人の幸福よ！ 其れは到底彼の沙漠の中に植られた木の比ではありません。

終に尙二三言申し上げ度い事があります。即ち我々公教信者は、耶蘇様を認め、其の宗

教を遵守する事に因て救靈の道に入るのでから、其の教義や掟を、さながらに戴かねばなりません。苟も耶蘇様の教示し給うた事、命じ給うた事、禁じ給うた事に就て、其の善悪を議論するやうな事があつてはならないのです。我々は常に耶蘇様は眞の神であつた、其の建て給うた宗教には寸分の誤謬も無いと云ふ事を忘れてはなりません。そして或教は是を守り、或教は是を守らぬとか、又或掟には従つても、他の一の掟を拒むとか、殊に

自分本位に割出した考

を正なりとし、己の氣に入る事だけは是を行ふ癖に、己の都合が悪い事は全く是を顧みないといふやうな其んな態度は最も慎まねばならぬと云ふ事を知らねばなりません。我々はどうしても其の當初耶蘇が教示し給うた教義や掟を、其の通り信じ、行ふ事に心掛けねばならぬのです。若し自分勝手な考を以て、この宗教を解釋し、自由に其の教義、掟を取捨するならば、其れは最早耶蘇様の宗教ではなく、全く其の人身の宗教になつてしまいます。そんな宗教に何の價値が有りませう。何の力が有りませう。彼の死と共に其の宗教

も消失してしまふ筈であります。乃ち我々は眞心から本當の信仰に生きやうとするならばそれには丁度、小學校の兒童のやうにならねばなりません。兒童は先生から教へられる字を一々入念に悉皆く覺へやうと致します。若し自分は此の字だけ覺へて、此の字は覺へないなど、其んな我儘を云ふ兒が有つたら大變でせう。耶蘇様も「幼子の如くなつて、神の國を受けないものは、天國に入る能はず」と教へられて居りますが、誠にその通りであります。我々は謙遜の心を以て、一々其の御旨に従ひ、ますます善い信者、眞實の信者となるやうに勵み務めねばなりません。



第十一 御托身の事(一)

耶蘇基督御托身の玄義、即ち天主様が人間となり給うたと云ふ事は、誠に是愛の玄義なりと云はねばなりません。昔パウリノと云ふ聖人は、或一人の寡婦の息子が奴隸になつてゐるのを救はんが爲に、自分が其の息子の代りになつて、奴隸となつたと云ふ事です。他人を愛せんが爲に我身を犠牲に供すると云ふ斯うした愛の物語は、常に聞く人の心を感動させずにはおきません。而して天主様は、解き難い罪の絆と、悲い地獄の苦罰に泣く

我々人間を救はんが爲に

聖パウリノよりも、もつと大いなる惻隱の情を現されたのです。即ち一切の人間を限りなく愛し給ふ處からして、畏れ多くも天主の御身を以て、自ら卑しい人間となるやうに思召されたのであります。次に是は又、義の玄義なりと申さねばなりません。即ち我々

ク
レ
ド

の罪を贖ふ爲には、どれ程大きな苦痛、艱難が必要であるかと云ふ事を示して、我々に罪の恐るべく、又、是を犯す事の甚だ憎むべきをお諭しになつたものであります。

さて、何處の國へ行つても吃度法律と云ふものが有つて、我々は罪を犯せば必ず此の法律に依て定められた處の懲罰を蒙らねばなりません。例へば、某所に盜難事件が起つたと致します。警察は直に犯人を捜索して是を捕へるでせう。次に裁判所は此の罪人の罪の輕重、及び其の罪を犯すに至つた心の動機などを、よく審査した上、それに應じた刑罰を宣告致します。そして罪人は是非とも是を受けねばなりません。彼は即ち義に依て裁かれ、當然の報復を受けたわけでありませう。無論、斯うして警察なり裁判所の行ふ處は、それが結局人間の爲す處である以上、種々の缺點があると云ふ事は、否めない事實であります。例へば、證據不充分であつて、犯人が巧く逃亡し完せた場合など、その義に依て是を罰すると云ふ事が、全く出来ません。それにはは大抵目に見えた、重大なる犯行に對してのみ行はれるものであり、又、是に對する制裁など、甚だ不完全な場合も尠なくないのです。

即ち輕い筈の罰が重くなつたり、或は其の罰の一部を誤魔化す事が出来たりすると云ふ、この人間が行ふ義てふものは、もう一つ徹底し難いのであります。處が天に於ける義と云ふものは、

天網恢々疎にして漏さず

と云ふ言葉も有るやうに、是は全く絶對的な義であつて、神は之に依り、我々の犯す一部始終の罪——隠れて行つた罪も、心の中で犯した罪でも——悉皆く其の些少な點に至るまで容赦なく裁き給ふのであります。我々が忘れてしまつたやうな罪でも、神はちやんと御存知です。假令其れが髮の毛程の罪でも、神が其の義に依て裁き給ふ罰から逃れる事ができません。斯う申すと天主様は甚だ無慈悲な御方のやうに思ふ人もありませんが、其れは大分見當違ひなのです。即ち天主様の我々を愛し憫み給ふの情ときたひには、迎も我々人間の拜察し得る限りのものではありません。人が一度赦せば、天主様は千度もお赦しになつてゐるのです。我れ罰を望むに非ず、慈悲を望むなり、と仰せられた神「母は其の子を

忘る事を得るとするも、我は汝等を忘るゝ事なし」と仰言つた神を、無慈悲などゝ云つては其れこそ口が曲つてしまひます。たゞ神は限りなく聖なる御方である、正しい御方である、それ故、其の義に反する罪と名の付くものは、假令

爪の垢

ほどでも、是を罰し給はなければならぬ。人間は大變可哀相なものだ、弱いから直に罪に陥る、それだけに尙益々憐みたいとは思召すが、併し罪人を放置つておいては義が許さない、天主様は心を鬼にしてゝも是を罰しなくてはならないのです。乃ち此の限りない慈悲と、秋毫も冒し得ぬと云ふ其の義が、如何にして調和し兩立するか、諸君、注意して戴き度いのは此の點であります。即ち神の量り知れない智慧は、こゝに靈妙なる御托身の玄義となつて顯れたのであります。

さて、普通一寸考へても分るやうに、罪と云ふものは、他のものに依て贖つてもらふ事が出来ませう。即ち罪の無い人が、罪人の身代りとなつて、其の罰を贖ふ事が出来るので

す。例へば、或家の息子が、其の父に對して大變な侮辱を與へたと致しませう。其の時非常に立腹した父親は、息子の相續權を取り上げて、是を勘當してしまつたとするのです。(是は、誰の目から見ても當然の成行に違ひありません)暫くたつてから、此の息子は、自分の悪かつた行爲を顧みて、痛く其の事を愧ぢ悔ひて、どうか又元通り、父親の寵愛を受けたいものだと思望するやうになつた場合、彼は自ら父の家に行つて謝罪を爲し得ませうか。否斯うした場合、假令左様にしても、非常に怒つてゐる父の事なれば、恐らく彼の願ひを受入れません。そして或は其の息子に面會する事さへ拒絶するやもしれません。そこで、斯うした折其の息子は、どう致すでせうか。先づ彼は屹度其の父の極めて心安い友人と云つたやうな人を訪問し、己が心中を打明けて、どうか父に謝つて呉れるよう依頼するに相違ありません。乃ち此の仲介者となつた人は、息子の父の許を訪れ、種々と宥め贖して息子の罪に對する怒の情を和らげ、其の許しを願つてみるのです。なか／＼頑固な父で、一向背きさうもない場合は、聊か口調を改めて、どうか我等が親友たるの友誼を以

て、之を許すやうにと願ふに相違ありません。斯うなると、怒れる父も、彼の親友の熱誠
 に感じ、且つは其の面目を立てる爲に、赦し難き息子の罪ではあるが、遂に是を許さざる
 を得なくなるのです。

或は又、こゝに一人の人が大罪人と名指されて、鳥流の刑を宣告された場合、愛心深い
 彼の息子は、其の父が受くるであらう苦難を思ふと、もう堪らなくなり、遂に

お上に願ひ出て

其の許しを得、父の身代りとなつて、自身が其の刑罰を受けたと致しませう。この時其の
 父は息子のお蔭で全く其の苦罰を免れる事が出来るわけでありませう。

或は又、此處に或人が大變な借金を致したとします。無論支拂ふべき金としては、一厘も
 所持て居りません。毎日々々其の債主に苛責られて、すつかり弱り込んでしまつてゐる時
 此の人の或親切な友人が、その難儀を見兼ねて、其の借財を悉く支拂つてやつたと致し
 ませう。この際其の負債者は、自らは一文の金も出さずして全く赦免されたわけです。

處で以上この三つの比喩に於ける各主人公に、罰がなかつたと云ふのは、勿論誤りであ
 りませう。彼等は皆當然蒙らねばならぬ筈の刑罰を、巧く他人の上に轉じ得たと云ふばかり
 でありませう。即ち第一の場合には、父の親友の執成と懇請が其の罰を消し得たのであり、
 第二の場合には、息子が「父の罪を己が身に引受けたと云ふ即ち此處に父の身代りに依つて
 罰が受けられたわけであり、第三の場合には、友人が負債者に代つて、借金を支拂つたので
 ありました。然らば斯うした場合、何人でも其の執成人たり、又、身代りたるの資格があ
 るかと云ふと、決してそんな仔細のものではありません。例へば、或高貴の御方に對して
 侮辱を加へた時、其の謝罪の爲の仲介人として、至つて身分の卑しい乞食の如きものを以
 てしたならば、どうでせうか。其んな事をすれば、先に加へた侮辱の上に、更にもう一の
 侮辱を加へるやうなもので、それこそ大變な事になつてしまひます。で、斯る場合はどう
 しても其の仲介者として申し分のない資格の人、即ち其の地位なり名譽が彼の侮辱を受け
 た人と同等若くばそれ以上の人でなければならぬのです。そうでなければ假令仲介者と

なつても、恐らく其の執成は受け入れられますまい。

そこで今度はこの天主様對我々の問題に當嵌めて考へてみませう。我々人類が天主様に加へた侮辱と云ふものは大したものです。元祖の原罪の上に、各自の自罪を積み積んできた我々人類の罪と云ふものは、全く天にも届く程でありませう。罪即ち知りながら天主様に背く事、反逆すると云ふ事は、是天主様の尊嚴を冒瀆するといふ大侮辱となるのであります。我々は眇たる一個の被造物にすぎません。萬事其の創造主たる天主様の御旨に従はねばならぬ筈のものであります。天主は其の

十 誠

を以て、汝等は斯くせよ、斯くせねばならぬぞと御命令になつて居ります。十誠は或一國或は數ヶ國だけの法律ではありません。是は萬民に示し給うた天主様の掟、我々の心底に刻まれた良心の聲であります。是は神と人、人と人、人と萬物の關係を示したものであつて、實に我々人間社會の基礎を爲すものであります。我々が罪を犯すと云ふのは則ち此の

常道を逸する事、天主の意志を無視して世界の秩序を亂す事、畏れ多くも天主の御業を壞亂する事であります。まづ惡魔の手傳ひを爲てゐるのだと云はねばなりません。是天主様に對する大謀叛、即ち天主の尊嚴を冒す大侮辱でなくてはなりません。併し人は斯ういふかも知れません。即ち、罪を犯す際、誰がそんな事を考へて居るか！と。云ふ事を止めよ、諸君、其れは辭柄にすぎません。我々の心に刻まれてゐる良心の鏡は、何事に當つても其の事の正邪を、ちやんと映し出し得る筈であります。

抑々天主様が最初人間をお造りになつた目的と云ふものは、實に天國を嗣がすお積りだつたのです。併し今日、人間が罪を犯して、天主様に對して大侮辱を加へてしまつたのに尙其の恩恵を受ける資格があると云ひ張り得ませうか？ 天主様の愛子であり、又永遠の天國の福樂を嗣ぎ得るものだと思ふことができませうか。例へば、國王に對して大罪を犯した悪人が、牢獄に投ぜられ、手足を嚴重に縛められながら、尙國王に對して其の恩恵を望む事ができませうか？ 否、罪人は今やたゞ其の刑罰を待つばかりであります。同様創造主に

背いた我々人間も、今はたゞ其の罪に對する罰を怖れ待つより致し方ないのであります。此の罰と云ふのは外でもない、地獄に於ける永遠の苦罰、即ち彼のルシフェルと其の麾下の悪天使等に與へられたものと同じであります。アダムが其の罪を以つて先づ是を招き、我々も亦、大罪を犯す度毎に此の罰を招いてゐるのであります。一度罪を犯した以上、天主様は必ず是を懲罰せねばならぬと云ふ、是が義と云ふものゝ本質であります。即ち此の寸分を冒さぬ天の義と、其の限りない天主の慈悲が、人間の上に如何に顯れるか、是は次に申し述べませう。

第十二 御托身の事(二)

(基督は我等が唯一の救主にて在す事に就いて)

アダム以下我々人間は、大小數々の罪を犯して、天主様に背いて居ります。一寸した誹謗や無駄口の一つをも容赦し給はぬと云ふ其の義により、若しこの儘に置くならば、我々人間は一人として地獄の苦罰から免れ得るものはありますまい。あゝ併し其れは天主様の慈悲心の到底忍び給はぬ處であります。何とかして人間を救ひ度いものと思召された結果遂に一人の身代りを立て、是に依り我々人類の罪を贖ふやうに御取計らひになつたのであります。此の身代りと成つた者は誰かと云へば、是ぞ天主様が、アダムに向つて「後に遣す者」とお約束になつた處の救世主であります。我々の數限りない罪を一身に引き受けて、

ク レ ド
 天主様の尊前にお執成下すつた

此の救世主のお蔭により、我々は恐しい地獄の苦罰を逃れ得たのであります。即ち是に依りて、天主の義には満足を與へ且つ我々が救はれ得たと云ふ、此處に天主の限りない慈悲は全く勝利を得たのであります。

さて、天主様と、是に罪を以て大侮辱を加へ奉つた人間と云ふ此の二者の間に立つて其の執成の業をなし給うた救主とは、一體如何な方でせうか。何分にも天主様に背いた罪です。若し乞食が皇帝に何か侮辱を加へてもしたら、人々は何としませう。それこそ大變なことになるに相違ありません。處で、我々が天主様に背いたと云ふのは、仲々是敷きの騒ぎではありません。卑しい一介の被造物の分際を以て、その創造主、萬物の王、尊大限りない天主様に加へた侮辱ですから、是が執成を願ふには、餘程勝れた人の手を煩はさねばなりません。そして、我々人間の中には是を求めることは全く出来ないであります。何故なれば、其れが人間である以上は、凡て皆救はれる位置にあるのです。どんな偉い聖人

でも、結局

謀叛人アダムの末裔

にすぎません。聖人に成り得たと云ふのも、それは、彼自身の力に因るのではなく、全く救主の功德のお蔭に依るのであります。天使の中にも此の執成人たり得るの資格のものはありません。被造物中最も勝れた聖母マリアでも駄目です。畢竟其れが被造物である以上如何に聖にして且つ尊しと云へども、天主様との隔間は無限であつて、到底是と並び立つて贖罪の重任を負ふなどと云ふ事は望めません。前節に於いて申し述べたやうに、斯うした仲介人となり得る者は、どうしても其の侮辱を蒙つた者と同じ地位、名譽等を所持してゐる必要がありました。そこで我々には今やどうしても天主様と同じ位を持つてゐる人を頼んで、是に執成して戴かねばならぬ場合になつたのですが、併し其んな人は勿論有りません。さればと云つて、天主様が、御自身で御自身に價を與へるなどと云ふ事は不可能な話です。例へば、私が或人に金を貸した場合、相手方に是を返済する能力がないからと

云つて、私が私自身に其の借金を拂ひ得るものでは有りません。若し出来たとしても、其れは本當に出来たのではなく、たゞ無條件で是を赦したのにすぎません。そして其れは、義てふものゝ容赦せぬ處であります。噫、此處に於て、我々は一體如何なりませうか。諸君、心安んぜよ。其の限りない慈悲よりする天主様の大能は、いとも靈妙なる御托身の玄義となつて顯れたのであります。即ち人の罪を贖ふ爲に、主は其の御獨子耶穌基督を下し給うたのであります。救主耶穌基督とは即ち人間となり給うた神であります。神性と人性を兼ね具へたお方でありませう。それ故、耶穌は其の人性に於いて、肉身を苦める事に依り、我々の身代りと成つて、其の罪をお贖ひ下されたのであります。處で、此の人たる性と神たるの性は、同ベルソナ中に全く一致してゐるのでありますから、耶穌様の此の苦難、此の贖が、人としての性の内に行はれたものとしても、矢張り其の神性の内にも自然に關係が生じてゐるわけでありませう。誠にそれでこそ限りない天主様に對する執成が出来たと云ふものです。

さて、斯うして行はれた贖罪の價値が、天主様の目に在つては如何なるに尊いものであつたでせう。全く其れは人間の加へ奉つた數々の罪を、全部贖ひ得て餘りあるものであります。諸君、此の尊い犠牲に因て、アダム以來の人類の罪は、全く贖はれ、その罰を赦され、我々は天國の永久の生命を授かり得るようになつたのです。乃ち我々は此の大なる天主様の御恩恵を感謝し、この救主の贖ひの御業を空うせず、永遠の生命を獲得すべく、惡を避け善を行ふ事に一生懸命にならねばなりません。そして、耶穌基督が其の御托身、御苦難、御死去に依りて積み給うた限りない功德と贖ひの寶——主は是を天主公教會に托されたのです——を我々は必要に應じて此の

天主公教會といふ寶倉

から貰ひ受けるやうにせねばなりません。誠に此の寶は、世の終りに至るまで、各時代の人々の需用を満たして尙餘りあるものであります。丁度是はどしどし湧き出る泉のやうなものであつて、其の盡きると云ふ事を知らないであります。我々は罪を犯しても、己が

力では逆も能く是を贖ひ得ませんから、そこで此の寶の倉に入つて入用の品を取るといふ
 即ち耶蘇様の功力を取つて是を天主様に捧げるのであります。すると天主様は其の御獨子
 の功力と贖ひの寶の故に、其處ではじめて我々の罪を赦免し給ふのであります。斯うした
 仔細で我が天主公教會内に在つては、日々其の罪の容赦を受ける爲に、信者等は耶蘇様の
 功德に與つて居るのであります。即ち洗禮に依つて原罪の汚れを潔められ、告解を以つて
 自ら犯した所謂

自罪の赦免

を受ける筈でありますが、併し此の耶蘇様の功德を充分に戴く爲には、心に大いなる罪の
 痛悔と、遷善の決心を起さねばならぬと云ふ事を忘れてはなりません。今後もう再び此の
 罪を犯さじ！てふ堅い決心が必要なのです。我々はその救霊を得る爲には、どうしても絶
 えす注意して、惡を避け、善を行ふ事に努めねばなりません。

處で諸君、我々が救霊を得るために、必ず無くてはならぬ此の耶蘇様の功德と云ふ寶は

實にわが天主公教會の内にのみ置かれてあるものだ、と云ふ事を知つて戴きたいのです。
 我々公教信者の目前には、常に此の有難い寶が置かれてゐて、何時でも必要に應じて是を
 掴み取つていゝと云ふ誠に何たる幸福でせう。併し未信者は如何かと云ふに、彼等は

眞の宗教の門外

に居るのですから、無論此の尊い寶の分前に與る事が出来ません。それ故もしカトリック
 教を知りながら、己の我儘をもつて改宗せず、一生汎を其の儘に終るならば、其の永遠の
 天國に於ける生命を取り逃がすに相違ないのです。人々に向つて其の改心を促がし、早々
 此の救霊の第一歩である處の洗禮を受け、わが天主公教會に入つて、信者としての位を得
 られるやうにお勧めするのは、右の次第だからであります。又、一度信者てふ名を得た以
 上は、もう如何な誘惑、困難にも敗けず、天國に達するまでの一生汎を、全く主に捧げ
 て、最も忠實、眞面目に天主公教的行爲を盡すやう努めねばなりません。我々を天國に案
 内する爲に、耶蘇様が何時も我等と俱においで下さる事を忘れず、其功德に依て力を得、

ク レ ド
 其の贖罪の業を思つて失望せず、益々勇氣をだして、此の多難なる人生を突破せねばならぬのであります。



第十三罪の事(一)

自罪とは、自らの罪と云つて、是は人の心の内から湧き出てくる處のものであります。原罪が、丁度遺傳に因る病弱な體のやうに、生れながらにして汚れてゐる靈魂の狀態を云ふに反し、是は遺傳に因らず途中に於いて其の靈魂に附着した病毒の如きものを稱するのであります。即ち原罪とは、自らは些少しも關係せぬ處の全く外から貰ひ受けた罪であり、自罪とは、我々自業自得のもの、我々が勝手に作つたものであります。又斯うも云へませう——原罪は我々をして大謀叛人の子たる位置に置くものであり、自罪は己れ自らを謀叛人たらしめるものである——と。乃ち自罪は其の人のみに限られた罪であつて、是は決して他に移りもしなければ、又、他から貰ふものでもありません。例へば學識と云ふもの——是は其の人自身に限られたものであつて、いくら親が學者でも、決して其の子供が

生れながらにして其の學識を備へてゐるものではありません。處が其の人の財産は、遺産として其の子供たるもの、さながらに是を譲り受くる筈であります。即ち、前の學識は自罪の如きもの、後の財産は原罪の如きものであります。さて以上の原罪、自罪と云ふ其の

罪とは如何なものか？

是は即ち公教要理にも誌されてあるやうに、知りながら天主様に背く事であり、思、望、言葉、所業を以て天主の誠を破る事であり、抑此の天主の誠、即ち其の十誠なるものは、人皆生れながらにして、其の心の内に深く刻みつけられてゐる處の法——所謂道徳律であります。そして、假令目に一字を解せぬと云ふ文盲の輩と雖も、其の心に書誌されてゐる處の此の十誠の文字は、必ず讀み得る筈なのであります。人は皆、同じ心、同じ良心を持つてゐるのですから、此の十誠の精神は、世界一切の人類、信者、未信者の別なく、各人の心に、生れながらにして、しかと植付けられてゐるものだと言はねばなりません。即ち吾人が此の誠に適つてゐる間は、是を眞の道に止まり、善を行つてゐるのだ

と云ひ、些少でも此の正理に違反する時、我々は惡を行ひ、罪を犯すことになるのであります。

世の中には凡て法則

と云ふものがあります。萬物は是に依り、はじめて其の秩序を保ち得るのであつて、若し是がなければ、其處には最早、秩序なく美なく、又、完全などを求むる事が出来ません。然るに天主様は、美且つ完全なるものに在すが故、其の御手に成つた世界萬物の中に、よく秩序の保たれてゐると云ふのは、是當然の事であります。空の星、地を匍ふ虫虻、さては其の邊の一木一草に至るまで、一切の森羅萬象は悉く神の法則の下に運行し、生存し、發生し、死滅してゆくのであつて、其處には實に糸亂れぬ整然たる秩序の保たれてゐる事を我々は認めざるを得ません。處で世界萬物が斯の如くであるのに、萬物の靈長とも云はれる人間が此の秩序外に勝手に生存するといふ法がありませんか。否、決して左様では有りません。即ち人間以外の被造物は、凡て其の限定られた性質に因り、無意識に自ら

一定の秩序を守り續けてゆくやうにされて居るのですが、我々ばかりは、智慧と自由なるものを具へて居り、意識的に此の秩序中に存し得ると同時に、又、此の秩序外に脱出する事も出来るのであります。天主様が我々人間に斯うした特権を與へ給うたのは、一體何の爲であつたか、是は人間が、何でも勝手次第な事をしていゝと云ふ所以だとは考へられな
い。是はどうしても、我々が其の意志に依て、斯くせねばならぬ事は必ず是を行ひ、斯くしては不可ないと定められた事は決して是を行はないと云ふ、即ちさうした事に因て天主の尊前に功積をたて、其の褒賞に與かるの價値を作る爲に外ならないのであります。故に若し此の

自由を亂用

して天主の立て給うた法則に背き、其の秩序を破るならば、則ち是罪であつて、其の罰は當然我々の頭上に下されるのであります。處で、其れなら我々の従はねばならぬ法則とは何であるかと云へば、是は先にも申したやうに、天主の十誡となつて人類一般の心の中に

深く刻みつけられてゐるのであります。

十誡中の初の三つは、無上なる天主様に對する拜禮、尊崇、感謝などを命じられたものです。人間が若し是を無視するならば、丁度、世界の本源を除くやうなものであります。それは建物の土臺を除き去ると變りなく、爲に、世の中は全く到壞混亂の憂目をみねばなりません。即ち我々人間が、若し全智全能にして寸分の誤謬なく、善惡を賞罰し給ふと云ふ無上絶對なる裁判官の嚴存するを認めない時に於いて、全體如何な行爲を爲し初めませう。恐らく一の善業をも爲す人がなく、身も心も惡へ惡へと傾いていつて、其の良心の全く麻痺してしまつた人間が、遂に惡魔の奴隸となりきつてしまふ時の事を考へると實に悚然たらざるを得ません。次に諸君は

社會の根底をなす道德

が忠と孝で有ることをよく御存知でせう。乃ち十誡にも其の第四に「汝父母を尊敬ふべし」と明らかに誌されて居ります。次は第五誡——是は人を殺したり傷付けたりする事を禁じ

られたものですが、若し斯んな事が、世間に妄に行はれるやうになつたら、其れこそ大變です。第六誠は、人間の子孫の系統と其の繁榮を保護するものであります。是なければ、人類は全く他の動物と何等變りありません。漸次に其の性が衰へていつて、遂には滅亡の域に瀕するであります。又、社會に盗み、誹謗、讒言などが公然と行はれるやうになつたら、それこそ安寧も秩序も何も有つたものではありません。其の時の混亂は、想像に難くありません。第九、第十の誠は、罪の思ひ、望みまでも起さぬやうにする事を教へたものであります。例へば悪草を刈る時、若し其の根を残して置いたならば、其處から又先の悪い草が生へて参りませう。乃ち我々の罪も、最初は微々たる考へから起り、望みとなつて生長し、聽て業を以て行ふやうになるのであります。故に我々は此の罪の原因である根、即ち一寸した考へ迄も起さぬよう、除くよう心せねばなりません。國家の法律に背けば、我々は其の定められてある刑罰を受けねばならぬのと同様、天主様の掟、即ちこの十誠に背く時は、我々は神の命令に反抗し、其の御旨に悖るてふ意味に於いて、どうして

も其れ相應の刑罰を受けねばなりません。而るを我々が

日々の行爲に就いて篤と反省

する時、果して心から天主の御命令に一々従つて居りませうか。天主様が、斯の如くせよと仰せになる事には、否我々は左様致しませんと答へ、又、是を爲すべからずてふ御聲に對しては、否我々は左様致しますと云つて居りは致しますまいか。勿論、明白に口を以て左様に答へたり、或は心に反對してゐるわけではなくとも、兎に角、我々の日々の行爲がさう答へてゐるのと同様の態度に出がちではありますまいか。我々人間は皆良心を持つて居りますから、何か悪い事を爲す折には、それ神に背くぞ！と云ふ聲が確に聞えてくる筈であります。それを承知で我々は罪を犯すのですから、是は何と云つても天主様に對する反抗、即ち侮辱であると申さねばなりません。

第十四罪の事(二)

先に申し述べたやうに、罪とは我々が、思、言葉、行爲を以て常道を逸すること、即ち一種の亂れであります。換言すれば、天主様への反逆、不従順、又、是に對する輕侮であります。そして此の罪——自罪——には大罪、小罪の區別があります。大罪とは重大な事に就て、全く承諾して天主に背くことであり、小罪とは輕い事に就いて天主に背き、或は重大な事に就ても、完全には承諾しないで天主に背く事であります。一度大罪に陥る時は、我々が洗禮の秘蹟に依て與へられた處の、天主様の御寵愛と其の聖寵とを失はねばなりません。即ち天主の御寵愛を失へば、天國の門は再び閉されてしまひ、今まで折角積んできた功績は全く無に歸し、靈魂は又、惡魔の權下に苦まねばならぬのであります。

大罪に相當する罰は

實に永遠なる地獄の苦罰であつて、我々が若しこの赦免を求めずして死ぬならば、どうしても其の苦罰を逃れ得ぬのであります。次は小罪、是は天主の我々に對する寵愛の度を減じ、その聖寵を薄らがしむものであります。今まで積んできた功績を失ひ、天國の門が全然閉されると云ふわけではありませんが、併し天國に入る前に、どうしても此の小罪の赦免を受くる爲に、此世に於てか、或は煉獄に止まつて、是に相當する罪を償はねばなりません。

さて、此の大罪と云ひ小罪と云ふ事を如何して判斷するか。其れは若し我々の良心さへ正しくあれば、明白に其れを示して呉れる筈であります。それに己が心では、どうも判斷し難い場合には、教父なり司祭が、ちやんと其れの解決を與へて呉れますから、我々信者は、少しも迷ふ必要がありません。故に諸君も、如何したら好いだらうかと云ふ岐路に立つた時には、未信者の行爲を標準としたり、或は世間の因襲とか、習慣に依て是を律せぬよう御注意願ひます。一體我々の良心と云ふものは、是は一の鏡のやうなものであつて、

第十四罪の事(二)

其の表面が汚れてくると、最早ものの姿を完全に寫す事が出来ません。即ち罪の習慣などに因て、良心の鏡が曇つてくると、もう物事に對して正しい判断が下せなくなつてくるのです。丁度、眼病人が、白いものを青くみたり、紫色を赤色と思つたりするやうに、其れは全く

精神的色盲

と變りありません。其れが罪になるのだから、罪にならないのだから、大罪なのか、小罪なのか、全く見當がつかなくなつてしまふのであります。斯うした場合、未信者であると其れに判断を與へて、本當の道を示して呉れる人が有りませんから、あれや是やと迷ひ迷つて誠に悲惨な状態に立至るのであります。偶像崇拜や迷信に流れてしまつて、心は全く悪魔の横領跋扈する處となつてしまふのであります。

次に天主の律法と、世間の法律とは、各々是を適用する方面が、全く相違して居ると云ふ事に就いてお話を致しませう。即ち世間の法律に依て與へられた處の刑罰の輕重を以て、

是は大罪だ、あれは小罪だ、と頭からきめてかゝるのは、少々早計である場合があると云ふのです。此の法律と云ふものはたゞ、社會の安寧、秩序を保持するのを目的としてゐるものであつて、各人が個人的に何をしてゐるか云ふ事に就ては、全く干渉致しません。即ち是は専ら

國家社會の秩序

を保つために作られた處の一の規則——此の規則の垣の中に一國民を纏めておかうとする一つの手段なのであります。天主の律法は全然是と趣を異にし、専ら人間各自の心を律しやうとするものであります。例へば何人かゞ、他人に迷惑を及ぼさない事だからと云つて、何か悪事を企てると云ふ、是などは無論大主様の律法の許さぬ處であります。世間には、よく、或悪い考へや企圖を、行爲、所業として外部に顯さない以上、罪が成り立つものではないと云つたやうな觀念を持つてゐる人がありますが、是は大變な誤謬と申さねばなりません。即ち行爲に顯れた罪は法律に依て糺され、心に潜む罪は、神是を裁き給ふ

ク レ ド
 のであります。故に若し好い機會が有れば他人の女を侵さうと考へたり、警察の目を巧く偷み得たら人を殺さうと企圖むだりするのは、要するに、彼等は未だ其の時機が到來せぬから實行せぬ迄であつて、心の中では、既に其の忌はしい大罪を犯してゐるのだと云はねばなりません。斯うした場合、表面的には罪と云へず、又、法律にも何等牴觸致しません。併し人の心を裁き給ふ處の天主様の尊前に出では、是は立派な大罪人として取扱はれるのであります。又、何人かに或罪を犯させる原因と成つた人、他人に悪事をなすやうに教へ唆かす人、他人の悪い手本となる人、或は子供や召使を監督すべき義務を持ち乍ら、其の生徒なり部下が罪を犯すのを見ても、一向其れを制止しやうとせぬ處の先生、主人、親なども、矢張り天主様の尊前では皆立派な罪人となるのであります。洗禮の秘蹟は、我々を信者の位に擧げ、失はれてゐた天主の聖寵を再び頂戴して、其の者を天國の相続人たらしめる處のものであります。然るに大罪を犯す事に依り我々は又々此の聖寵を失ひ、天國の門より遠ざけられ、其の信者たるの資格を取上げられてしまはね

ばなりません。併し幸ひにも耶蘇基督は我々の原罪ばかりを贖ひ給うたのではなく、實に此の自罪までも御贖ひ下されたのであります。乃ち此の自罪を消す爲には悔悛の秘蹟をお定めになつたのです。信者は、此の悔悛の秘蹟に因つて洗禮後の罪を赦免され、再び天主様の聖寵を受け得るやうになるのであります。尤も此の罪の赦免を戴くには、條件として、眞實なる痛悔と

斷乎たる遷善の決心

が是非なければなりません。即ち犯した罪を痛く悔ひ悲むで、今後再び罪を犯して天主に背くぐらゐなら寧ろ其の御前に死んだ方がましであると云ふ、此の固い堅い決心が必要なのであります。

我々の靈魂の救かりを失はすものは罪であります。然り、實に此の罪こそ我々の救靈を失はしめるものでありますから、我々は飽まで是を憎み嫌はねばなりません。靈魂の救りなどと云ふ事に就いては一向頓着せぬ處の未信者ですら、立派な人たる爲には、どうして

も罪の避けねばならぬものであると云ふ事をよく知つて居ります。而るを諸君、我々は天國に達せんとする途上にある信者ではありませんか。此の目的を達する爲に第一の障害となるものは、實に此の罪であると云ふ事を心に忘れず、常に細心の注意を拂つて是を避けるやうに務めねばなりません。

こゝに罪を三に大別することが出来ます。即ち

肉體、世間、惡魔

と云ふ此の三の敵を我々は持つてゐるのです。此の敵に對して、我々はどんなに弱いものであるか。是は諸君も日々の經驗に依てよく御存知であります。而も最後は、此の罪に勝つて天國の門に入るか、或は敗けて地獄に落ちるか、此の何れか一を擇ばねばならぬであります。そこで我々は此の大敵に向ふに廻して、一か八かの戦をするには、どうしても何かの力を借りねばなりません。さうせぬと如何しても勝つ見込がないのです。處で諸君、有難い事に、天主様を始め、聖母マリア、守護の天使、或は總ての聖人方が、天上

より、我々の味方になり、援助を與へ度いと頻りに望んで居られると云ふのです。斯うなればもう我々の勝利は確實だと云はねばなりません。併し其れには熱心な祈が必要で、天主、聖母、天使、諸聖人に向つて日々刻々熱心に其の救助を祈り求めねばなりません。誘惑に遭ふ時に於て特に然せねばなりません。それに又、自ら力を盡して罪の便りを避ける事が必要です。「天は自ら助くるものを助く」といふ諺があります。即ち我々は天主様の祐助を求めると同時に、

自らも亦能ふ限りの注意をなす事

が肝要なのであります。聖書にも「危険を愛する者は滅びに陥る」と誌されてあります。

第十五 耶蘇基督の公生活 (一)

耶蘇基督は幼少の頃から、づつとナザレットと云ふ村に住まはれ、聖母マリア及び聖ヨゼフの許にあつて、只管

孝養を勵み從順を守つて

居られました。御年齢三十歳にして、愈々その本當の任務である救世の大事業を果すべく、親の許を去つて公生活に入られたのであります。若し或皇帝が何處かに行幸を仰せ出される時には、まづ、それにさきだつて侍從が派遣され、其の御道筋の警衛とか或は歓迎法、さては御宿の事などを、篤と調査し、又、各所の長官などと、よく打合せをして後、はじめて其の臨幸を仰ぐものであります。基督が、いよく人民の中に御教を弘める爲、公生活に門出なし給ふと云ふのは、則ち、天主様が御自身人々の中に御出でになるわけに

なるのですから、天主様は是を前以て人々に知らす爲に、丁度、皇帝が侍從を派遣するやうに、一人の先驅者を御遣しになりました。そして其は此の場合非常に必要な事でした。何故なれば、即ち主の我々の中に來り給ふ有様は、綺羅を飾つて華々しく繰りだす現世の王様の如くではなく、却つて其の神たる稜威を人間の卑い肉體の下に包み隠して來られたからであります。偕、其の先驅者と擇ばれて主の來り給ふ事を人々の中に傳へ證明した人は誰であつたか。それは大聖人である處の洗者聖ヨハネでありました。抑々

耶蘇基督の此世に來り給うた理由

は、一切人類の心を治める爲であつて、まづ我々の心の内に神の聖寵を興へ、信仰を起させ、信頼を強め、愛する事を勵まし、總ての善徳の芽を出さしめる爲でありました。それ故、洗者聖ヨハネの任務は、救主の御聲をよく聞くために人々の心に其の覺悟を爲させ、是を潔白なものと致さねばならぬと云ふ事でありました。即ち彼は、救主の來る時の近づいたと云ふ事を人々に告ぐると共に、又、我々の心の潔白を汚す罪を責めて、その悪い行

爲を改ためさす爲に、彼等の心に痛悔を起させ、或は又苦業をなす事などを頻りに勧め、それに因り人々が救世の事業の恩恵に與かり得るやうにと、努めて居つたのであります。で、彼は悔ひ改ためる人に對して洗禮を授けて居りました。勿論この洗者ヨハネの施して居た洗禮は、罪の赦免を與へるのではなく——人の罪に赦免を與へ得るのは基督のみであります——たゞ心の悔ひ改ための公の印、即ち各自が犯した罪に對する謙遜なる告白であり、救主の本當の容赦を戴く爲の覺悟だけに止つたのであります。丁度、喪服を身に纏ふのは、亡くなつた人に對する心の愁傷を外に顯したものであるのと同様に、

洗者ヨハネの洗禮

も、罪の赦免そのものではなく、たゞ悔ひ改ための印にすぎませんでした。この洗者ヨハネは徳の非常に勝れた大聖人でありました。その弟子達は彼をみて、この人こそ實際の救主に相違ないと考へてゐた程でしたが、併し彼は常に謙遜して『自分は救主ではない、又豫言者でもなく、何でも無い人間であるが、併し聽て自分よりも優つて力ある者が後から

来るであらう。自分は其の人の履の紐を解くにも足りない者である』と申して居りました。

恰も其の頃、公の任務に就かうとされた耶蘇基督は、御自分は何の罪もないお方であつたにも拘らず、一切の人間の罪を己が一身に引受けて御出でになつたものですから、他の罪人と同様に彼等の中に混り、洗者ヨハネの許に來て洗禮を御受けになりました。之は人に苦業と謙遜と悔ひ改めの手本を示し、且は御自身を人々の中に知らず爲でありました。さて、耶蘇基督が洗禮を受け給ふと『天は開け、聖靈形に顯れて鳩の如く耶蘇の上に降り給ひ、又、天より聲して、汝は我愛子なり、我汝によりて安んぜり、と曰へり。』之は聖書に誌された其の時の有様であります。又、洗者ヨハネも自ら耶蘇様を證明して

『看よ、神の羔を！』

看よ、世の罪を除き給ふものを！』と申しました。之は即ち「看よ、此お方は、羔の如くに人々の罪を贖ふ爲に犠牲となるべき救主である」と云ふ意味の豫言であります。(耶蘇

ク レ ド
 キリストが洗禮を受け給うた時、聖靈が鳩の形を以て顯れましたから、聖靈の表象として鳩の形を用ふるやうになり、又、聖ヨハネの證言に依て、耶穌基督を表徴すのに羊の形を以てするのであります。諸君も御存知と思ひますが、舊約時代に於て最も尊い犠牲は羊でありました。是は後の世に我々の罪を贖ふ爲に十字架上の犠牲となるべき救主を象つたものであります。それ故、信者は毎日誦へる處の祈禱の中に『世の罪を除き給ふ神の羔』と云ふ聖ヨハネの言葉をもつて耶穌基督に對して祈るのであります。

斯うして耶穌基督は受洗後愈々ユダヤ國を歴巡つて教を陳べ、救世の事、天國の事などを宣べ傳へられたのであります。はじめは唯一人で此の事業を行つて居られたのですが、後には十二人の使徒達と七十二人の弟子をお擇びになりました。一體、耶穌基督の任務は、たゞ我々を救ふと云ふ一點にとゞまつてゐたのではなく、更に此世に、眞の神より出た本當の宗教をお建てになると云ふ事でありました。この本當の宗教の首頭は、固より其の創立者たる神に在す耶穌御自身であります。併し基督は、人々の間に繼に三年を過し給

ふのみで、馳て天にお還りになる筈でありましたから、その御昇天後、御自分に代つて、この宗教を統べ、其の

信者 を 指導

する爲に、代理となるべき者を教育しておかれる必要がありました。凡そ位のある人は、それに相當する權利と實力とを所持してゐるものですが、宗教の頭となる爲にも、その權利を所有するのみではなく、其の上、神に關する事を充分に悟つてゐねばなりません。それ故、耶穌基督が使徒や弟子達をお擇びになつた目的は、たゞ御自分の聖教を、それらの人々に聞かせ守らせるだけでなく、彼等をして、御自分が此世を去り給うた後、その宗教を治め指揮せしむる爲に、適當なる能力を興へ給ふと云ふ事でありました。で、其の弟子等を選び給ふに際しても、必ずしも學者や金持などと云ふものに重きを置き給はず、却つて其の常々愛し給ふ處の謙遜な、そして

心の 貧しい

労働者とか無學者の中から多くお擇びになつたのであります。

耶蘇督は當時弟子達やユダヤの民に向つて、如何なる事を教へ説かれたのでせうか。それは、今日に至る迄天主教會が司祭の口を以つて教へてゐる處と全く同じものであつて、諸君が公教要理の中に於て學ばれた教理と何等變る處の無いものであります。即ち耶蘇様は彼方此方を歴巡りながら、常に天國の事、救靈の事、又、眞の宗教に依らねば人間は其の救靈を得る事が出来ぬものである、などと云ふことを告げて居られたのであります。萬民は均しく此の宗教に入るべきものであり、その覺悟として専ら罪を避け、徳を修めねばならぬと云ふ事を頻りに説き勧め、且つ又、御自分こそ人々が久しく待ち望んで居つた救主であり、人々を救ふ爲に、聽て十字架上の犠牲となるべき神の子であるてふ事も公言して居られました。さうして人々の前に語り給ふに當つては、常に至つて平易な言葉と巧妙な比喻に依り、高遠な眞理を實に分り易く釋き示して、聽く人の心の底まで透み込ませ、學者をも文盲なる者をも等しく感服せしめ給うたのであります。

耶蘇督と云ふお方が現れ給うたと云ふ事や、其の所々方々に説教爲し給ふと云ふ事がユダヤに於いて非常な評判となりました。耶蘇様が書物を研究して居られるのを、誰も見たことがなく、又、學校へ行かれたと云ふ事も聞かないのに、彼は世の最も有名な大博士も及ばぬ程の勝れた學問を持つて居られたので、學者達は相互ひに顧みて、一體基督は、何處に於て斯の如き智識學問を得たのか、と不思議がつて居りました。又、其の當時のユダヤ人は

救主の出現

を待ち、且つ其の時期の近付きつゝ有る事も知つて居りましたが、その救主なるものは、大なる権力者として現れ、其の力に依てユダヤ國は盛になり、世界中の國を悉く征服して之を治むるやうになるべきものと考へて居りました。故に、自ら救主なる神の子なりと呼はり給ふ耶蘇の、貧しく、柔和で謙遜なる有様を見て、これこそ彼等の救主なる神御自身であると云ふ事を少しも信じなかつたのであります。彼等はみな耶蘇を指して「彼は大工

ク
レ
ド
の子ではないか」と云つて居りました。

或國に公使を派遣する時、その任命された公使が外國へ行き、其の國の政府に對して、たゞ口先だけで、自分は公使として其の國に派遣されたもので有ると云つただけでは足りません。必ず自國政府の信任状と云ふものを見せねばならぬのであつて、これが己の公使たる資格を證明する最も大切な證據となるのであります。耶蘇基督も矢張り人々の中へお出でになつた時、天主様から授かつた處の信任状を持參されました。その信任状と云ふのは即ち其の御業、奇蹟であります。神の能力にあらざれば到底爲し能はぬやうな業をするならば、それは眞實の神であると云はねばなりません。然るに耶蘇基督は

神を差措いて

は到底不可能であるやうな數々の奇蹟を行ひ給うたのでありますから、彼は自らその神たる事を立派に證據立てられたわけであります。

第十六 耶蘇基督の公生活 (二)

一の極めて見事に出来上つた手藝品を見る時、我々は、それに因て之を製作した職人が並々ならぬ名手で有る事を悟り得るものですが、同様に、我々は奇蹟を見た際も、それは必ず神の干與し給ふと云ふ事を考へざるを得ないのです。何故なれば、奇蹟を行ふ能力は、神にのみ存するものであると云ふ事を諸君も御存知であります。即ち人間が奇蹟を行ふ力を有するとしても、其の力は彼自身から出たものではなく、全く神より其の力を借りてゐるにすぎません。耶蘇基督は、ユダヤ國中を彼方此方とお巡りになつた時、御自分の言葉を信ぜぬ者に對して、「若し我言葉を信する事が能きぬのならば、私の行ふ業を信ぜよ」と云つて數々の奇蹟を行ひ給うたのであります。其の主なるものを上げるならばまづ第一に

澤山の病人を全快せしめ給うた事

です。そして、その病人を癒し給ふ様は、世の醫者の如く薬を飲せたり、之を塗つたりして、而も長い時日を要するのとは全く趣を異にし、耶蘇様は唯一言葉、一の命令を以て即時に總ての病人を癒されたのであります。聾者は聞こえ、盲目は見え、癩病も淨められると云ふ、實に耶蘇の前に癒ぬ病と云ふものはなかつたのであります。それ已ならず、彼は又屢々悪魔に憑かれた人々から、之を矢張り一言を以て逐ひ出し給うたのです。上手な醫者といふ者は、種々の病を治癒し得るものですが、併し如何に學問が有り、又如何に長い間の經驗を積んだ人でも、人間の體に憑いてゐる悪魔を逐拂ふと云ふ事は、迎も出来ない仕事であります。然るに耶蘇はどうでしたか。たゞ其の一言葉に因て、彼等を救ひ給うたと云ふ、即ち其の御言葉の力の前には、悪魔は何の抵抗も爲し能はずして、直に彼等から逃げ出したのであります。

耶蘇は又、或る婚姻の祝宴に列し給うた事がありました。その時、葡萄酒が缺乏して

しまつて、主人が甚だ困却してゐるのを御覽になり、乃ち一言葉を以つて、其處に在つた六つの大きな水甕の

水を葡萄酒に變化

せしめ給うたと云ふ事もありました。又パンの數を限りなく殖して、澤山な人々に與へ給うたと云ふ奇蹟も二度程あります。即ち初めの時は、御自分の説教を聴きに來て居た處の四千人ばかりの人に對して、自ら祝し給うた七つのパンと、纒な魚を分かち與へられました。が、その多勢の人々が皆飽く程食べたにも拘らず、パンと魚とは、優に尙ほ七つの籠を満たす程残つたと云ふ事が聖書に誌してあります。二度目の時は、五つの麪と、二つの魚をもつて、五千人の人を飽食せしめて其の屑を拾ひ集めたところが、十二の籠を満たしたのであります。斯うした耶蘇の行ひ給うた、不思議な奇蹟を一々述べれば限り有りませんが、之等の總てに超えて驚嘆すべき奇蹟は、死人を甦らすと云ふ事でありました。重病人を一言葉で癒すと云ふ事は、成程不思議に違ひありませんが、併し死人をさへ蘇ら

せ給ふとは、全く我々の考へも及ばぬ處であります。耶蘇様は、其の一言葉をもつて數人の死者を甦らせ給ひましたが、その中ラザルと云ふ人は、葬られてから四日間も経つてゐた爲、その死骸は既に腐敗しかけ、惡臭を放つて居た程であつたにも拘らず、實に耶蘇の一聲に因て、忽ち其の死骸は生命を享け、丈夫な者と何等變りない姿をして甦つて來たのであります。耶蘇様は、斯うした奇蹟を行ふ不思議な力を、弟子達にも授けられたので、彼等は耶蘇基督の御名に依て、等しく種々の奇蹟を行ふ事が出来ました。で、斯様に玄妙な業を、造られたものゝ中に爲し得るものが有るでせうか。否、勿論有りません。斯様の業を行ふ爲には、どうしても、無より凡てのものを創造するのと同様の力がなければならぬ筈であつて、其の力は全能者に在す天十様のみ所持し給ふ處のものであります。諸君、

死者を甦らす

と云ふのは、全く之を創造するのと同じ事ではありませんか。又纔か七つのパンを以て、

五千人からの人々を飽食せしめると云ふ事は、恰も一粒の種子から、よく數百、數千の米や麥を實らせるのと同じわけであり、盲人の目は開き、聾者に耳を返すなどと云ふ事は、全能者にして、はじめて、よく爲し得る處の業であります。それ故、若し斯様に不思議な業が何處かで行はれるのを見たならば、我々は、其の業に必ず神の干與なし給ふ事を信ぜねばなりません。乃ち耶蘇の行ひ給うた處の諸の不思議な業は、實に神御自身の爲し給ふ業だつたのであります。それに依て耶蘇基督は、第一に、御自分は萬民の頻りに待ち望んで居つた救主で有ると云ふことを證據立て、第二には、御自分は眞明に神の御子であることと云ふ事を人々に示し、第三に、御自分のお立てになる宗教こそ、眞の神より出た唯一の宗教である事を證明されたのであります。例へば、王様のお出しになる、詔書の眞偽を見分けるには、その詔書の上に捺して有る印影に依るのですが、さて耶蘇基督の教へ給うた事の眞であるか否かと云ふ事は、何で知る事が出来ませうか。我々は其の御言葉を證明する爲の

ク
レ
ド
神の印判

の如きものである奇蹟を以て、之を信するのであります。而も天主様は、眞實其のものに在して、本然的に我々を欺き給ふ事の能きぬものである事を考へる時、最早我々は其の示し給ふ處の事を、一途に信するばかりであります。世間の他の宗教の内に、斯様な固い證據のあるものを一つでも見つける事が出来ませうか？ 否々、わが公教を措いて、他に之を求むる事は不可能なのであります。さて以上申し陳べた事は、動かし得ぬ事實であつて我々は之を道理に依り、又、良心に依つて了悟する事が出来るのであります。處で當時に在つて、其の數々の奇蹟を目撃した人々は、それを行ひ給ふ耶穌基督を神として認め、躊躇する事なく、其の御教に違はねばならぬ筈であつたのに、事實はその反對でありました。福なる哉、心の潔き人、彼等は神を見奉つるべければなり、と。之は聖書に誌されて居る處であります。げに然り、我々の心にして素直純清である場合は、別に奇蹟などに因らずとも、直に明らかに神を見奉つる事が出来るのであります。丁度それは、幼子が遠方

からでも、其の母の聲をよく聞き分け得るやうに、心の眞直な人は天主様の御聲を、常によくお聞きする事ができるのであります。併しこの反對に心の汚れ、常に惡の奴隷となつて居る人は、いくら明らかに其の智慧が眞理を承認してゐても、其の心は冷く暗く鎖されてゐて、神の光を受け入れることが出来ません。斯く人の心を頑固になすものは何かと云へば、即ちそれは特に傲慢心であり、又、邪慾、利己心、名譽慾などであります。耶穌基督は、その靈妙な業に依て人々を眞理の道に入らすべく、随分お努めになつたのですが、併しそれに對しては誠に僅少しか報ひられなかつたのであります。當時大概學問の有る人や役人などは、少しも耶穌様を信じやうとせぬのみか、却つて之を甚だ輕んじ、迫害を加へて遂に死に至らしめ參らすやうな事を敢て致したのであります。彼等が斯る態度を採つた原因は、第一耶穌様が貧しく育つて、別に學校に行かれた例もないのに、その智慧と云ひ、學識といひ、凡て彼等に挺でて遙に勝れ給ふをみて、内心之を非常に嫉んで居た事や、又、外の人々が基督の奇蹟に感じて、或は遂に之を王位に擧げるやうな事になりは

せぬかと考へ、若しそんな事になれば、自分等は其の地位と権力などを失はねばならぬ羽目に陥るかも知れぬと云ふ、其んな愚しい利慾心と、心の傲慢のために、耶蘇を敵視し、之に害を加へたのであります。抑々耶蘇基督の御説きになる處は、即ち

まづ己の一切を捨て

神の義に依て、其の行爲を律せねばならぬと云ふ事、又其の心の最も潔白清淨なる者とならねばならぬと云ふ事、或は人を愛するに、其の敵までも愛さねばならぬなどと云ふ事でありましたが、併し當時の彼等の有様は如何でしたか。彼等は其の不義にして得た世の寶を擁して日夜空しい快樂を追求め、心は邪惡の住所とでも云はふか、常に怨恨、憎惡、復讐等の惡念に満たされて居りました。それ故、まづ惡を捨て罪を避けて、神の國と其の義を求めよ！ と大聲に説き教へ給ふ耶蘇の聖言が、彼等には苦く耳痛かつたのは當然の事でありませぬ。又、耶蘇基督に對し、又その言行に對して一切無頓着、冷淡に過ぎる人も大勢ありました。即ち現世の所謂俗事と云ふもの、家庭の事とか、其の商賣の事などに

全く氣を奪られてしまつて、彼等は、宗教などは、その實生活とは甚だ縁遠いものであると考へて居たのであります。それ故、彼等は敢て之を求めず、又其の掟を守るなどと云ふ事の必要を更に認めなかつたに相違ありません。斯る人の爲には、靈魂の救かりの事とか未來の生命などと云ふ言葉は、全くその意味をなさないであります。彼等は一體人間といふ者は、何の爲に現世に生れて來たのか？ 又、如何せねばならないのか？ などと云ふ問題に就いては、聊も考へてみる事をせず、その一生涯を何の目的もなく、たゞ漠然と過ぎてしまふのであります。所謂

醉生夢死

彼等は些少の智慧を持つてゐるの外は、他の動物と大差なく世を終つてしまふのであります。それらの人々にとつて、耶蘇基督の説教を聞き、又其の奇蹟を見たりするのは、丁度路傍の香具師が喋り乍ら、何かを爲してゐるのを見るのと變りありません。彼等は、たゞその好奇心を以て、之に對してゐるのみでありましたから、耶蘇の有難い言行も、彼等に

は何の影響も與へなかつたのであります。そして又、卑劣な徒輩になると救主耶穌基督様の數々の奇蹟を幾度見ても尙足れりとせず、もつと不思議な、もつと大いなる奇蹟を行ひ給ふやうに要求致すのであります。即ち是は、其の御業を見て耶穌様を信じ、其の教を承認しよう爲の目的ではなく、たゞ耶穌様を誘ひ、其の全能の足りない事を人々に認めさせ、それに因て人々を彼より遠ざけやうとする、實に憎むべき心底を以て爲した事であります。無論耶穌は、最初から彼等の計略を、すつかり見抜いて居られました。而も其の願ふ處の徴を見せるやうに承諾致されました。乃ち彼の徒輩に向つて仰せらるゝに「我は死刑になるべきものである。そして死後三日目に甦つて墓の中から出るであらう」と。悪人等は此の徴を喜んで見せて戴かうと申しましたが、之は何もそれに依て、耶穌を信じやうとする爲ではなく、全然そんな事は不可能なことだと思つてゐたからでありました。耶穌基督が死人を甦らせ給うた事を、彼等は實際目撃して居りましたから、之を否認する事は出来ませんでした。併しどうして

自分で自分を甦らす事

が出来やうぞ、と彼等は安心してゐたのであります。處が、どうでしたか！ 耶穌は三日目に其の御言葉通り實際墓の中から甦り給うたのであります。併し何處までも卑怯な彼等は、それをも他の奇蹟と同様に信じませんでした。聖書に、ラザルと悪い金持の話があります。是は右の次第をよく物語つて居ります。即ち「若しモイゼと豫言者等とに聽かざる彼等ならば、假令死者の中より復活するとも信ぜざるべし」と。

救主は其の御復活といふ大いなる奇蹟を豫言し、之を成就爲し給うたのであります。是は悪人達の頑迷な心に對して、もはや辯解の出来ないやうにする爲であり、又一方では其の弟子達に對し、その信仰を益々堅固なものとする爲だつたのです。即ち是に因て、天主教會は、確乎として動かす事の出来ない土臺の上に据えられる事に成つたのであります。

第十七 奇蹟に就いて

以上、耶蘇基督は、種々の奇蹟を行つて、その神たる事を、證據立て給うたと云ふ事に就いて述べましたが、併し世人の中には、奇蹟と云ふものは、別に基督教にのみ限つたものでなく、外の宗教にも是をみる事が出来ると云ふ人が有るかもしれませぬ。即ちどんな宗教でも、その宗教の所謂神の力に依て、不思議なことが行はれ得るものだとか考へてゐるのであります。例へば、或神様を信心して病氣が快癒したとか、或は何處々々の神様に因て斯う云ふ不思議な事が爲されたとか云つてゐるのであつて、而もさう云つた事が、彼等の信仰の根強い土臺を成してゐるのを、よく見受ますが、我々公教信者は是に對して如何なる見解を持つべきかと云ふ問題に就いて、以下に少しく申し述べませう。

さて、まづ外の宗教に有つたと云ふ不思議、奇蹟が、抑々どんな根據を持つてゐるか

云ふ事を考察ねばなりません。それから大概みな最初は何人か、ふと喋つた處の曖昧な話が、次から次へと云ひ傳へられるうち、

尾に鰭が付く

といふ例に漏れず、漸次に大きくなつて、遂に人々が勝手に一つの奇蹟を形作つてしまつたり、或は又、或書物に誌してある不思議な事を、何の分別もなく直に信じてしまふと云つた次第なのであります。で、斯うして容易に其れを信ずると云ふのは、要するに彼等が其の事を重大視して居らず、又、其の事に就いて確乎とした信仰を持つてゐないと云ふ事實を明らかに物語つてゐるわけであつて、若し彼等にして、其れを重大視するならば、必ずや嚴重に之を調べて後でなければ、其の信仰に入らない筈ではありますまいか。即ち或人がAなる人に向ひ「自分は死んだ貴方の親に對して大金を貸して居つた」と云つて、其の返済を請求した場合、Aなる人は其れが果して事實なりや否やを嚴重に調査して、動かすことの能き確な證據を認めたと上でなければ、決してその支拂方を承知するものではあ

第十七 奇蹟に就いて

りません。若し世の人が、此のAなる人と同様の努力と熱心をもつて、己が遵奉つてゐる宗教の、奇蹟と稱へられてゐる事柄に就き、とくと考察するならば、屹度それらは

何の根據もない作り話

の類にすぎなかつた、と云ふ事が分明する筈であります。然るに世の人々は如何ですか、彼等は假令其れが作り話であると分明つてゐても、その嘘とか、本當とか云ふ事には全く頓着せず、唯々として人の云ふがまゝに是を受け入れてゐるのであります。さうした不思議な話と云ふものは、人に聞いたり、又、之を他人に傳へたりするのが一寸面白い事でありますから、彼等は其れに依て、一時の己が好奇心を満足せしめ、果して其の事が實際なりや否やと云ふ事の詮索などは、全く要なきものとしてゐるのであります。處が、之等の人々に向つて、今度は耶穌基督の大なる奇蹟、即ち立派な歴史上の根據の上に立つ處の奇蹟、堂々大衆の眼前に於いて明らかに行はれ、其の宗教の眞實性を確證した處の奇蹟に就いて話して御覽なさい。彼等の多くは之を信じやうとしますまい。そして或者は片意地に

も頑とし、何處までも之を否定しやうとするのでありまして、斯うした者は、基督の時代から今日に至るまで、之を否認する確な證據を得んものと、随分苦心して研究するのですが、その結果は、常に此の事實を破る事が出来なかつたのであります。にも拘らず彼等は何故尚その不信の態度を改めなかつたのでせうか。一體此の耶穌基督の奇蹟は、先にも申した通り、天主公教は眞正の神の宗教であると云ふことを、證據立てゝゐるのでありますから、この奇蹟を是認する者の良心は、自ら其の宗教の掟を守るやうにと要求するものであります。が、而も是に従はないと云ふのは、恰も悪い負債者の如きものであつて、即ち自分が借金してゐて、之を支拂はねばならぬと云ふ事を、内心承知してゐても、之を支拂ひ度くない爲に「自分には一向借りた覺へがない」と言ひ張ると同じであります。で、人が改心して此の宗教に歸正らうとする際も、智慧はよく之に賛成してゐるのに、悪心がむら／＼と湧いてきて、其れを妨げるのであります。

我々は、誤れる嘘の宗教の中に傳へられてゐる、利々の不思議を信ずるのは愚かな事で

あるのを知つてゐますが、併しそれらを一切悉く、嘘であるとして否定し去る事も出来ません。成程それらの中の九分通りまでは、架空な作り事であるとしても、残る一分は、或は眞實であるかも知れないのであります。是に就いて、わが信者は如何な態度を採らねばならないか。是を説明するに先立つて、まづ

奇蹟とは如何なものか？

と云ふ事を考へてみませう。諸君もよく御存知の通り、奇蹟とは唯神の全能のみ能く之を爲し得る處の、此の自然界の法則を超えた凡ての業であります。例へば、或薬に因て病氣が癒ると云ふのは、その薬の効驗に依り、自然的に治癒るのであつて、別に是は奇蹟ではありませんが、併し彼の耶蘇が爲し給うたやうに、何の薬を用ふるのではなく、唯の一言葉を以て之を癒すと云ふのは、全くの奇蹟と云はねばなりません。何故なれば、之は自然界の法則に超えた事であり、又、斯る力は、如何なる被造物の中にも到底求め得ぬといふ即ち之は神のみ所持し給ふ處の力であるからであります。天主様が、天使や人間を御創造

になつた時、各々に或權能を附與されました。そして我々が之を行使し得る範圍も亦、その時限定されたのであつて、奇蹟を行ふとか豫言するなど云ふ事は、全く此の範圍外に置かれてあるのであります。で、若し天使又は或人が、一の奇蹟を行つたと云ふ場合、是は決して、彼等自身が爲し得たのではなく、たゞ一時天主様が其の力を彼等に貸與へられたに過ぎぬのであつて、要は天主様が天使或は人間を道具のやうに使役つて、御自分の力を顯されたまでなのであります。

例へば、皇帝は大臣を任命し、大臣は其の下役を任命致します。或大臣が他の大臣を任命すると云ふ事は出来ません。即ち是は皇帝のみ爲し得給ふ處の事ですが、若し何かの理由があつて、皇帝が其の權能を他の人に委任された際には、彼人は何人かを大臣の位に上げる事が出来ます。然乍彼は、自分の權能に因て是を任命するのではなく、専ら皇帝の權能をかりて、或一定の場合のみ斯うした事が能きるのであつて、實際を云へば、それも結局皇帝の權能が働いてゐるにすぎません。是と同様に、天使或は人間が奇蹟を行ふの

は、それは自分の能力に因て爲し得るのではなく、神が一時だけ其の

權能を委託

されたままであつて、實際には唯天主の能力のみが働いてゐるといふ、即ち神が其れを直接に行はれるのと何等變りないのであります。さて、神はこの奇蹟を絶えず行ひ給ふのではなく、極めて稀に其の全能を以て之を爲し給うのであります。而してその目的は、我々人間に御自分の思召す處を示し、又その御旨を了悟さしめる爲に外なりません。

抑々人間の良心と云ふものは、善惡の區別を識別する事に因て、天主様の一般の御望み即ち十誡の何たるかを了知る事が出来るのであります。そして、其の外、特に或る思召を人に示し給はうとする場合、例へば如何にして天主様を拜禮すべきものか、と云ふ事を教へ、又或は眞の宗教を立て給はうとする際などには、天主御自身は靈體に在して、人間の目に見る事が出来ない故、何人かを其の代理として御遣しになり、而も其の者が、誠に神の委任を受けたものである事を立證する爲に、是に奇蹟を行ひ得る權能を附與し給ふので

あります。それで我々人間は、天主様の外には到底爲し能はぬ業や奇蹟を行ふ者を見て、彼は天主様の委任を受けて、遣されたものであると云ふ事を信する事が出来るのであります。乃ち耶穌基督は、其の神たる性を悉く人性の下に隠し、全く一介の人間と何等變りない御姿をもつて此世にお降りになりましたが、併しその行ひ給うた數々の偉大なる奇蹟に因て、彼の神にて在す事を明らかに知り得るのであります。又、彼の使徒達が、世界中に行つて能く其の聖教を擴め得たと云ふのも要するに、天主様が其の奇蹟をもつて、彼等に援助を與へ、且つ之を堅め給うたに外ならぬからであります。又、後の世に於ても、天主様は、信者を教へ戒める爲に、度々聖人をお遣しになりましたが、彼等が天主の委任を受けた者であると云ふ事を人々に信ぜしめ、又、

公教は

御自分の立てた、眞實の宗教であると云ふ事を立證する爲に、奇蹟を行ふ權能を彼等聖人に附與致されたのであります。是に依て考へるならば、奇蹟とは即ち天主様の印判の如

ク レ ド
 きものでありまして、我々は是有るに因て、始て其れが誠に神より出でた啓示であり、又宗教である事を確認なし得るのであります。世に此の印を持つてゐる處の宗教は、云ふまでもなく我が公教ばかりであつて、他の宗教特に偶像教に於ては、決して眞實の奇蹟を持つて居らないと云ふよりは、寧ろ到底是を持ち得る筈がない、と云つた方が妥當であります。諸君も考へてみて下さい。どうして天主様が、誤謬つた事や、偽りのものに其の大切な判を捺して之を證明することをなさいます。これは或皇帝が自分に對して謀叛を企てた者の書類や書附の上に其れを證明すべく、その親判を決して捺し給ふ筈がないのと同様であります。然らば世の偶像教の神に依て行はれたと稱する所謂奇蹟に就いては何と解釋すべきでありませうか？ 愈々此の問題に就いて考へてみませう。

さて、此の偶像教に於て、時々顯れたと云つてゐる處の奇蹟が、眞實のものでないのは云ふまでもない事です。即ち是は天主様の全能に因て爲されたものではなく、全く嘘偽の奇蹟であつたか、或は

幻術 巫術

の類に過ぎなかつたのであります。で、此の幻術とは抑々何であるか、又、何物の爲業なのでせうか。我々は此處で嘗て陳べた處をもう一度思ひ出さねばなりません。乃ち我々は人間に超えた智慧と自由の所持者である天使と云ふものを知つて居ります。公教要理に依て學んだやうに、此の天使の中の或ものは、天主様に謀叛を企てた爲に天國から追ひ出され、悪魔と名付けられて、遂に永遠の滅亡の淵に投げ込まれてしまつたのであります。而も尙彼等悪魔は、我々が想像なし得ぬ程の智慧と能力を持つてゐて、地獄に落されてからは、たゞ一つの事、即ち人間に對して、神を拜む代りに自分を拜ませたい、自分を神として人間に認めさせ度いものだと言ふ事に就いて一生懸命になつてゐるのであります。狡猾なる悪魔は、其の方法として天主の御業をよく眞似ると云ふ、即ち天主様が奇蹟を以て其の宗教を確立致された事を充分知つてゐる彼は、是を巧に模倣して人々を欺くのであります。天主の奇蹟に似て非なる彼等悪魔の業、即ち幻術なるものが人々を偽りの道に